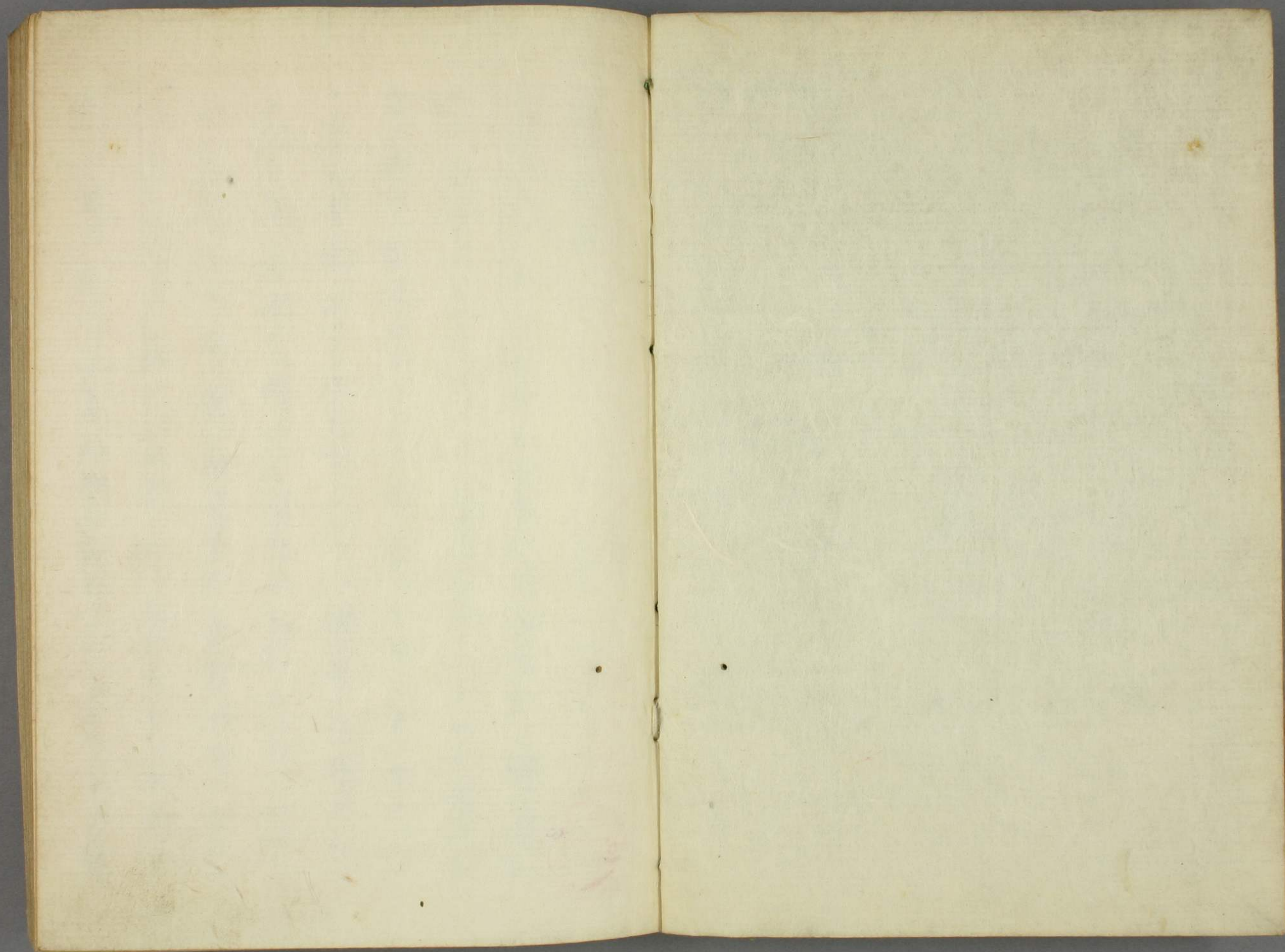


リ 5
4895
4





リ5
4895

神史問答



去
五味均平蔵



或問古傳ノ説ニ旧本紀古事紀日本書紀ヲ神道ニ
部ノ本書ト号スト云リソレ旧本紀ハ二十四代推古天
皇ノ御宇聖德皇太子大臣藤原宿禰馬子奉勅所撰
ニシテ古事紀ハ四十三代元明天皇和銅五年太朝臣安万
侶詔ヲ奉シテ記スル所ナレハ旧本紀ヨリ其事ニ委ク
其文モ明ラカ可成ニ還テ旧本紀ハ實細密ニシテ古
事紀ノ文簡ニシテ疎ナルハ如何 ○答曰推古天皇御宇
紀文ヲ撰シテハ日本書紀推古天皇二十八年ノ文曰是

年皇太子島、大臣共ニ議シテ録ス。天皇紀及國紀、臣連
伴造國造百八十許等、本紀トアハ是ナリ。然レニ皇極天
皇四年、蘇我氏亡ル、其家ニ火シテ紀文ヲ焚ク。至
テ康孫王ノ裔、船史惠秋、燼中ニ入テ國紀ノミハ取出シ
ヌレト。天皇紀、國造紀悉ク燒テ不傳。皇極紀ニ曰、四年
正月己酉、蘇我臣蝦夷等臨誅、悉燒天皇紀、國紀。
^疾珍寶、船史惠秋即疾取所燒國紀、而奉中大兄。
日本書紀ノ文如是。十九、今流布スル所ノ旧本紀十
卷、神代本紀ヨリ國造本紀ニ至ル、十一門ニ分テ全備

シ。燼余ノ書ニハアラス。國造本紀ニ諾羅朝ト記セシハ元明
天皇ノ御宇ナリ。推古天皇ノ朝ニ撰ム所ノ書ニ何ソ元明
天皇ノ朝ノコトヲ載セラレニヤ。如是ノ附奪甚タリ。日本書
紀ニ國紀バカリヲ取出セシ旨見ヘタルニ、天皇紀、神代紀以
下備リ傳ルノミナラス。文体ノ古ナラサルコト眼ヲ著クヘシ
其上、旧本紀ト号スル名目ハ何人ノ所為ソヤ。先ノ旧辭
トアハ古事紀ノ序ノ文ニ據テ、後人ノ設シモノニヤ。北畠大
納言親房卿以後ノ書ニ誤リ用ヒテ證トスルコトハナリ
タリ。不勘論スルニ足ラス。何夫ノ神道三部ノ書トシニヤ

但ト部氏ニテハ神道三部經ト云モノ迄アル由ヲ明法案
集ニ其家ノ人記サレタレハ抱腹ノ一トガラ措テ説ヲナサ
○問古事紀ノ序ヲヨムニ古事紀ハ四十代天武天皇ノ詔
ニヨリテ舍人~~禊~~田阿禮ヲシテ帝室ノ日繼及ヒ先代ノ旧
辭ヲ誦ミ習ハシメテ元明天皇和銅四年ニ阿禮、
年老ヌレバトテ正立位上勲五等太~~朝~~臣安万侶ニ詔テ
阿禮口傳ノ旨ヲ筆記セシメテ三卷トスル由ナリ歟ハ日
本書紀モ舍人親王ト共ニ太~~安~~万侶撰ム由ナレハ古事紀
ハ日~~本~~書紀ヲ著スノ草稿ニシテ日本書紀ハ古事紀ノ清

書ナルベキヤト覺ス此義如何 ○答古事紀ノ文甚簡
古ナリヲ以古書ナレハ疑無シ其全文ノ雜撰ナレ何ノ朝
撰ノ書ト云ニヤ序ト本文ト又者ノ巧機誠ニ天淵ナリ
太~~安~~万侶ノ撰トセシガ為ニ後人ノ序ヲ偽作シテ副ヘタ
レ成ヘシ藤原明衡本朝文粹ヲ輯ムル序ノ類ニモ是ヲ
載セス凡本邦ノ書ニ序ヲ加フル一~~今~~義解ノ序亦
作格ノ序ヲ始トス例ヲ古事紀ハ只野史ト云モノニテ
民間俗傳ノ書トシタリ日本書紀ノ草本ナト、論ス
ハキ書ニハ非ズ ○問何ヲ以テカ日本書紀ノ草稿ニ

ラズトシ又朝史ニ非ズトスルノ微トセシヤ ○答天子

ノ宝篋ハ朝史相同シカレハキ更ナシ其説ノタカヘル

神武天皇 日本書紀 百二十七歳
古史紀 百三十七歳

綏靖天皇 日本書紀 八十四歳
古史紀 四十五歳

安寧天皇 日本書紀 五十七歳
古史紀 六十三歳

開化天皇 日本書紀 百十五歳
古史紀 六十三歳

往々皆知是此類ノ一アゲテカゾヘガタシタトハ神日本

磐余彦ハ上古ノ謚ナリ後ニ神武天皇ト漢文ヲ以テ

謚ストイヘ凡日本書紀ヲ奏セラレク時代ニテハ漢文ノ

謚ハナカリシ故神日本ノ号ヲ以テ紀セラレク後人其下ニ

神武天皇ト細書ニ加ヘタルノ古史紀ニハ神武天皇

ヲ本号トシ神日本等ヲ以テ諱トノセタリノ是古書

ナレ凡日本書紀ヨリハ後ニ書タル民間一傳ノ書ナリ疑

ヘカラスノ證トスヘシ ○同日本書紀神代卷ニ一書曰ト

アハ別ニ古書アリテ其説ヲ引タルモノナレカ或説ニ古書

ヲ引ニハ非ス一説曰ト云々ニ看ルヘシトブ如何 ○答

本章ニ皇統ヲ紀ス故ニ天照太神ノ父ノ崩御ヲノセテ

母ノ崩御ヲノセス一書ニ實系ヲ書ス故ニ伊弉册ノ尊

ノ崩御ヲノセテ伊勢諾尊ノ崩御ヲ紀セサルノ類タテ賢
ノ卷ヨリ横ノ卷ノ論ニテ可考又日本書紀撰述以前ヨリ
有来ル古書ノ説ノ本章トヌガヘンヲモ後ノ考ヘノ為ニ
一書ト載ラレタリ雄略紀ニ百濟新撰ト云書ヲ引
神功紀魏志百濟記晉書赴居註ヲ引ノ類アリ齊
書直智德書安作連智德書右同書調首淡海書
明紀ニ伊吉連博德書ト云ヲ引テ又伊吉博德言ト
引ルアリ難波書出男人書曰トアケ高麗沙門道顯
日本世記曰ト引類同アリ一書曰一日或曰ト引ルハ
異説ヲノスル也一本曰旧本曰或本曰別本曰ト書ルハ

後人日本書紀教本ヲ合セテ鑿定セシ勅物ノ一ニシハリ
仁德紀註日本旧記曰
傳リテ今ノ本ニノコリ記セシ可成必シモ一書曰ヲ書傳
ニ非ス一家ノ説々トノニハ看ルベカラズ○問上古ニ
文字非ズ老少口々ニ相傳フ歟ハ十六代應神天皇
ノ十五年百濟王阿直岐ト云學者ヲ日本オクルニ
天皇阿直岐ニ向ヒ汝ニ勝シタル博士アリヤト勅問アル
答ニ王仁ト云者アルトノ義ニヨリテ上毛野君祖荒田別
巫別ヲ百濟ニ遣シテ王仁ヲ徵同十六年二月王仁来
朝ス是ヨリ我日本ニ文字ヲ書テ知ル子細ハ日本書

紀應神紀云々タリ東國通鑑曰百濟ヤマト近肖古王二十
九年晋孝武皇帝以高興為博士百濟自開國未有文
字至是始有書記之者仁德天皇六十二年アタシバ
百濟國之文字ノ始テ行ル一王仁日本へ来リシヨリ凡
ソ九十年後ノ一也然レハ百濟ヨリ来リシ王仁學問ノ
祖トナル一疑フヘシ○谷續日本紀新撰姓氏錄等
王仁ヲ以テ漢ノ高祖ノ裔孫トス王仁百濟ニアラバ何
ソ文字ナカラシヤ其上周ノ武王箕子ヲ朝鮮ニ封ズ
箕子政ヲ施サバ文字ナクニバ不可有五雜俎曰夷

狄諸國莫礼義於朝鮮ヨリ中畧古名鮮卑周名朝鮮
而新羅百濟高麗為之三韓今為一統稱朝鮮
云々三才圖會曰武王封箕子於朝鮮中國之礼
樂詩書醫藥卜筮皆流于此云々後ハ三國ニ分レテ
李氏一統シテ國名ヲ旧キニ復ス東國通鑑ハ彼國
ノ史記也トイヘ凡國初文字ノ濫觴ヲ誤リ傳ヘテ
託セシニヤ朝鮮ノ文章ハ助聲ト云テ日本ノテニ
才ハノ如キモノアリ又諺文トテカナヅケノ如キモノ
アリ漢語ヲ韓語ニ訳スル使リトセリソレヲ以テ

王仁ヨリ傳へり日本ノ古文ナレ故顛倒又ハスグヨミニ
シテカハレベキ字ヲモカハラズニヨム類多シ梅久ハ王仁
ハ漢高祖ノ裔トイハレ教世三韓ニアリテ王仁ニ至リ
吾國ニ來ル可成 ○問神代ヨリ應神帝迄ノ一ハ
口傳ニヨリテ王仁以後コレヲ紀シ王仁文字ヲ教ヘシヨ
リ其時ノ一ツ其世ノ人ノ記セシモ有ベシ日本書紀
ヲ梅久ハ二十八代履仲天皇四年八月始之於諸國
置國史言交達四方志ヲ履仲帝ノ御宇ヨリ
史官ヲ置シタルトナシハ事細密ニハツタハル不可ト

云ハレ國ノ大綱ハ記シトムハシ然レシ凡千古ノ一ヲ考ヘ
ソヘテ通紀セシ書ナシ三十四代推古天皇ノ御宇是
ヲ通紀シテトイハレ其書亡ビテ不傳古事紀ハ新
史可成トノ答ヘオレバ日本朝撰ノ書ニテハ日本書紀ヨ
リ古キハナシヤ如何 ○答三十九代天智天皇ノ御宇
令ヲ撰シ及ビ後ノ詞今云中臣後俗天種子命ノ撰ト
スル者ハ微ナシ別ニ勅物アリ
ヲ定メラレ令ノ書世ニ傳ハラサレハ四十二代文武天皇ノ
朝ノ令大ニ行ル故也弘仁格ノ序ニ曰既且千推古天
皇十二年上宮太子親作憲法十七條國家制法自

茲始焉降_テ至天智天皇元年制_ニ令_ニ廿二卷世人所謂

近江朝廷之令也_{云々} 此序藤原冬嗣卿ニシテ
本朝又粹卷ハニセタリ ○同日本

書紀ヲ撰セラルハ舍人親王一人ノ手ニテ十ノ説有リ又九

慶ノ竟_ノ夢ノ説ヨシハ舍人親王多安万侶共ニ之ヲ撰ストソノ

説如何 ○答續日本紀才ハ養老四年五月ノ文日先

是一品舍人親王奉勅修日本書紀至是功成奏上紀三十

卷茶圖一卷_{云々}先是ト云文アリシ奉勅日時ヲ誌サズ

今案ハ續日本紀和銅七年ノ文日詔從六位上紀朝

臣清人丰宅藤原令撰國史トアリ和銅ハ元明天皇

ノ年号ニシテ其七年甲寅元正天皇元年ニ係レリ日本書紀

奏覽ノ養老四年ニテハ七ケ年ニシレハ寂初和銅七年

舍人親王撰史鑿察ノ勅ヲ奉ニテ是ヲ撰スルハ紀氏三宅

氏等十人ニシ舍人親王此時三十四歳 公卿補任養老四年ノ文ニ
四十歳トアルヲ以コレヲ知ル

後ニ多朝臣安万侶ヲ加ヘテ文章ヲ定メシム多安万侶ハ

神武帝ノ皇子神八井耳命ノ後胤ニシテ一時ノ儒宗

ナルヲ以テナリ康保私記序日往昔舍人親王鑿_成

日本書紀也和銅奉勅詔養老_中加_テ多安万侶史

文一飯安万侶_{云々}弘仁私記序日夫日本書紀者一品舍人

親王從四位下勳五等太朝臣安万侶奉勅所撰也清
史雅天皇負宸之時親王及安万侶等更撰此日本
書紀三十卷并帝王系圖一卷養老四年五月二十日
功夫甫就献於有司舍人親王八其奉行こし集
成ノ功ハ紀氏三宅氏等ニアリ又ヲ成シテ朝史ト定ル
一ハ安万侶ニアル初○問和銅七年ノ公卿補任ヲ考
ルニ知大政官事ノ職ハ二品總積親王ニシテ左右ノ大臣ノ
上ニアリ何ソ日本書紀撰定ノ鑿察ニハアヅカリ玉ハズシ
テ舍人親王ニ勅アリシヤ○答舍人總積共ニ大武皇子

ニシテ總積親王才識ノ名不傳舍人親王ハ兄ニシテシカモ博
識ノ聞ハ國史ニ具ヘタリ故ニ舍人親王ヲシテ鑿察セシ
メ玉フカ○問日本書紀ヲ撰シ鑿察ノ一ヲ天武天皇
ノ皇子ニ勅シ玉フニハ其誰謂アリヤ○答日本書紀天武
天皇卷下日十年三月庚午朔丙戌文曰夫皇御于大極殿
以詔川嶋皇子忍壁皇子廣賴王竹田王桑田王三野王大錦
下上毛野君三千小錦中志部連首小錦下所墨連稻敷
難波連大形大山下中臣連大嶋大山下平群臣子首合記
定帶紀及上古諸事大嶋子首親執筆以錄如是一

天武天皇ノ詔ニヨリテ國史ヲ撰カケタルニ重子テ紀氏ニ宅
氏ヲシテ正訂スルニ至テ天武天皇ノ敕テリコ慮ヨリカコリシ
御印ヲ立シタメニ其御子舍人親王ヲシテ其事ヲ掌シ
メ取テ可成 ○問國史ヲ撰高品ノ人ヲ以鑿セシムル
一外ニ例アリヤ ○答唐書百官志曰正觀以後多以
宰相監修スレテ國史遂為故實也ト云日本書紀已後ノ國史
モ皆如是 ○問續日本紀ニ紀三十卷系圖一卷トアリ
今ノ本系圖ト云モノ無シセビタルニヤ ○答紀三十卷ト
アルハ神武紀ヨリ持統紀一テ四十代ノ紀文ニシテ神代卷

上篇下篇ヲ一卷トシ神代ヲ以テ帝王ノ因テ來ル系圖ノ
卷トス別ニ考アリ今ノ本神代卷ヲ三十卷ノ内ニ加ヘ名
ヲ以テ系圖無キニ似タリ其考證長キヲ以テコレヲ略ス
○今世神代卷ヲ講スルヤ巫祝家ノ傳ヲ以テ宗トシ
何レノ神主ノ傳某ノ神家ノ說ト立來レリ家傳私說ハ
公道ニアラス如何 ○答某ノ社ノ故實ハ其神人ノ知ルヘキ
一也祭祀ノ業ハ神家ノ任トス神代卷ハ國史也文字ヲ
以テ託スレバ文字ニアフカル感ノ知ルヘキ一ニテ神家ノ秘傳
ト云モノハ皆私ノ臆見ノミ何ヲ取ニ足ニヤ故ニ古來日本

書紀ヲ朝家ニテ講スルハ儒者ノ任ニシテ別ニ神道者ト号スル者ハ無シ祭官ハ昔ヨリアリ来シ凡史文ニハアツカラザル也養老五年此書ヲ講ゼシ人各傳ラズ弘仁三年ノ講至博士形部少輔多朝臣人長兼和六年ノ博士散位正六位上菅野朝臣高年元慶二年博士伊豫女善洲朝臣愛成延喜四年ノ博士大學頭藤原朝臣春海兼平六年博士紀伊權女矢田部宿禰公望康保二年ノ博士撰津守橋朝臣仲遠イワシモ神祇官ノ人ニ七折ス又神社ノ祝官ニテモ無シ學問ノ功ヲ以講主トハ成シナリ近年神道者ト号スルモノ教流アリテ奇怪ノ説ヲナシ古史ノ本旨ヲ損ズコトニ於テ日本ノ故實ミナト巫祝ノ道ニ隔ル懸ムベキナラズヤ○同越前守為時カ女メ世ニ紫式部ト稱スルハ上棟門院ニ任ヘテ光源氏ノ物語ヲ著セシニ堅ノ卷横ノ卷ヲ書タレ才覺能コト日本書紀ノ堅横ヲ得意シタリトテ御堂殿道長子ニ日本紀ノ寫トヨビテウケテ旨河海鈔トトモ見テ九十九代後光嚴院ノ年号ニ貞治年中忌部正通所註ノ神代卷口訣ニモ堅横ノ説アリトイヘ凡テギラハシキ説ニテ得意シガ名

流

神代卷豎横ハイカミ着ワクベキヤ ○答中古以後ノ
學者豎横ヲ分別セザル故神紀神書混雜シテ怪
詭ニ通ナリ偶理ヲ以テ説クモノハ古義ヲ失フニ至ル
正通ノ中訣ニタテヨコノ説アレバ其名ヲ知テ其實
ヲシラザルノ論也源氏物語其文ハ取ルベシ其古又ハ
猥雜ナリトイヘバ豎横ノトリハハシ善ク神紀神書ノ
大旨ヲ得テ書クモノ也五面仁明 五七陽成 空醒 空朱 雀 康保一テノ私記悉ク
亡失シテ傳ハラスト云ハバ頼三康保ノ私記ノ殘冊四卷
世ニ傳ハリテ古來ノ神史ヨミテ豎横ノ義分明ナリ

康保二年講スル日本書紀博士搦仲遠ノ私ノ記文コレヲ私
記ト号ス弘仁五面仁明 五七陽成 空醒 空朱 雀美和元慶延喜承平五度ノ博士ノ私
記ハ古キニヨリテ康保私記ニ多ク之ヲ引テ證トス故ニ
右五部ノ私記ノ説モ間存シテ其豎横ヲ説ク同一ニ
シテ異義無シ予コレニヨリテ中古以後ノ諸家ノ説ヲ
看破シ康保以前ノ古義ニ本テ元八百年ノ惑ヲ解
ニトス神代卷スベテ云トキハ神史也ワケテ云時ハ神紀
ヲ豎トシ神書ヲ横トスト看ルヘシ ○問其神紀神書
ノ差別如何 ○答日本書紀ニカキリ書紀ノ二字ヲ置ク

是レ紀ト書ノニツヲ以テ豎横ヲ亮所以也續日本紀以下ハ
紀トハカリ置キ又ハ實錄トシテ書紀ヲ分タス紀ハ豎ニシテ
天子皇統ノ本紀也之ヲ本文トシ天地開闢ノ章ヨリ
鸕鷀草葺不合尊ノ章一テハ章ヲ豎トス右ハ章ハ皇統
相承ノ義ニヨリテ日嗣ニダモタセ五ハ兄弟姉妹ノ論十
ク君トシ上トスカワテ細変ニカラス即位ノ次序ニカス
ルノ傳ナリ史記五帝本紀索隱ニ曰紀者記也本其事
而記之故曰本紀又紀理也絲縷有紀而帝王書稱紀者
言為後代綱紀也云云書ハ横ニシテ皇統ニカレ異說家

々ノ書傳ヲモセ皇統ノ次序ニカレハラス實系ノ次第ヲ
モアデタリ本章蛭見尊ヲ天照大神ヨリ弟トスレモ
ハ即位モウヲ以天照大神ヲ弟トス是皇統ノ次序ヲ
用レ紀ノ体豎ノ卷ノ文法也一書第一ニ蛭見ウレモ
ヲ書ス是實系ノ次第ノ下ニテ書ノ躰横ノ卷ノ文法
ナレ此得意アリ本章ト一書ノ蛭見ヲ別ナリトシテ
蛭見傳ナド、新說ヲナス徒アハ一書曰トアハ實系
ニシテ横ノ卷ナリヲ識ラサルノ失也○問今ノ神
史每字和讀ニシテ古來日本ノ文字アリテ書タレハ後ニ

漢字ヲソヘタルモノ也トノ説アリ然レドモ天地未開イ
トダトヨミテ又ヒラケズトカヘシテ讀ム和讀ノ古風トハ
見ヘズ其上和ヨミニセ子バナラヌ一ハ何々此^ミ曰何ト和讀
ノ章洋アリ又^ハ響音^カ丁及ナドトツケタルハ正^シク文字
ノトリアワカヒ也古來ハ音ニヨム一儒書ヲヨム如クニシテ
神名國名古語ナドハ和讀ニセズシテハスマザルヲ以別ニ
説ヲツケテ漢字ニテ如是ハ書タレハ是ハ古來日本ノ
古語ナレハ此^ニハ何トヨムトノ義可成巫覡ノ徒神事
メカスベキトテ悉ク和讀ニシタル故史ヲアムル人ノ本意

モ文字ノ置所ニヨリテ一字ノ顛倒ヲ以一篇ノ旨ヲ失フ
莫アリ焉哉乎也ヲモ用ヒタル書ナレハ殘ラス讀クダシ
ニスルヨリ義理乖戾シテツ井ニ神史怪談ニオワルトミ
ヘタル^知○答古來音訓相^レ違ヘテ文ハ音ニテヨミ莫ハ訓
ニテヨミタル書也一概ニ訓ニテヨム一ハ中古以後ノ一トミ
タリ^未善清行^ハ書ニモ音ニテヨム證ヲ引レタリ神代卷
下篇。於是^コ俯^フ順^ノ象^ノ言^ニ。一書ノ文ニ日^カ釀^テ天^ノ。一^タ酒^ノ案^ニ
スルニ俯^フシテトヨミ^タ。一^タ酒^ノ案^ニ改メザルハ古ノ
讀法ノ一^レハリノユル可成今ノ神史ヲヨム人訓義

ニノミカハリテ文意ヲ論ゼガレ故変實ヲ失フ予ニ於
テハ古ニ從テ文ヲ音ニシ事ヲ訓ニスルノミ
○同諸家
神道者流ニ造化氣化身化心化ノ四化ヲ以テ説ク有
案ルニ觀無量壽經ノ玄義分ヨリ出タル説ニシテソレヲ
假リタルト見ヘタリ然レハ之ヲサシオキテハ始テ人
ノ生スル根本ノ論ヘカカリガタシ如何
○答神史ハ
天照大神登極以後ヲ説ベシ然レハ其因來所ヲ説ク
タメニ伊弉諾尊ノ一ヲ説クニ其以前ノ一ハ假リニ五行
ヲ次テ神名ヲ配シ來ル天地アレハ人アリ其始タルカ知レ

ベキヤ開闢ノ説ハ想像ノ論ナリコレヲ知レシコレヲキム
ベカラス西化ノ説モ其理ハ如是ニテモアルラトハ云ベシ其変
如是也トハ説ヘカラス開闢ノ説ヲキハメントセバ勞シテ切ナ
キノミ非ズ変理日ニクラク穿鑿ニオキテ智ヲ損セシ
一疑ベカラス只其原ヲ記セシ為ニ開闢ノ章ヲ篇首ニカ
カルリ書クアムノ法トノミヤスラカニ看過スベシ
○同
天地開闢ノ一ヲ記シタル書モ多カルベキニ何トテ淮南子
ノ天文訓ノ篇ヲ以テ日本書紀ノ開篇トハセラレタルヤ
○答淮南子ハ漢高祖ノ子厲王長ノ子ニテ名ハ安其書

二十一篇才三篇ニ天文訓アリ其文今神史ニ引トコロハ大同
少異凡天地開闢ノ理ヲ説モノ淮南子ヲ始トス其後性
々ニ説来ルコトヲ以其説ノ古キヲ取テ同卷ノ文トスルナラ
ン俗説ニ文ハ淮南子ニカレト意ハ大ニ別也漢土ノ開闢ト
日本ノ開闢トハ其理甚ダ殊也ト云モノハ誠ニ神道者
流ノ僻見ナリ天地ノヒラテ始ルト云理ハ一カ國一致ニシ
テ文物ノヒラケルニハ前後アルヘシ開闢、於テハ同一ナ
ク以テ淮南子ノ文ヲカリ扱日本ノ始メハト次ニ故曰
ノ文アリ今ノ學者神道者流ノ俗ヲ脱バ固蔽ノ説ヲ

モトヌカレベキ歟 ○問神史ノ道理ガ千ナレ文ハ儒書ニ
ヨリテ書タルト云フハ聞其文ニヨリテ見ヘタリ佛書ニヨリ
テ書タル文トハ如何 ○答少彦名命ノ了ハ大宝積經目
連故更ヲ以テ書キ木花開那姫ノ無戸室ノ更ハ五百弟
子本行經是誤當言羅摩羅也ノ故事ニ據リ彦火々出見尊ノ海島
ニ遊玉フフヲ龍宮ニ書ナセシ文ハ法華經ヲカラスシテ
何ゾヤ其文饒ヲ省テ其更實ヲ看ルヘシ其文饒ヲ
省ク一ハ儒書ハモトヨリ佛書ヲモ大概知ラズシテ
ハナリガタカレベシ其更實ヲ撰ヒ得ルハ日本故實

ヲ曰又ニ學子ブニアラズシテハイカニ博ク學子テノ変ヲ此神
史ニ約ニスベシ ○同神武紀曰神武天皇自天祖降降臨
以逮于今一百七十九万二千四百七十餘歲此年數何
ニヨリテ考得タレモニヤ凡ソ二百万歳ナドモ有ベキニ
四百七十餘歳ト半端ノ數マテヲ細密ニシタレバ不審ノ
第一変ト云ヒ其上彦火瓊之杵尊治天下三十一万八千五
百四十二年彦火之出見尊治天下六十三万七千八百九十
二年鸕鷀草葺不合尊治天下八十三万六千四十二年都
計一百七十九万二千四百七十七歳也トノ説ハ其原倭姫ノ也

託ト云杜撰ノ偽書ヨリ起リタレモナリトハ知りナカラ日本
書紀第一ニコレノセタレタレ數ニ於テハ疑ナキニモ非ズ神武天皇
ノ宝算百二十七歳如是ニハカニ減シタレ理モイブカシ
春秋緯ニ自開闢至于獲麟凡ソ三百二十七万六千歳
トアル類ト同ク天地ノ運數ヲ比計スルノ算數ナルベキヤ
如何 ○答神武紀ノ一百七十九万二千四百七十餘歳ト
詩經南日標有梅其實三兮論語三思三復字彙以陽之一合陰之二而
ノ數ハ一七九二四七ヲ通シテ三ノ數トナル口傳有テ神史
次第重之其數三也。説反三數名天地人之道也。天台玄義類通三法
ニ三歳ニナル迄脚ヲズ教問セズト必三年ヲ以テ言
ニハアラズ年所久シキノ義ヲ三ノ數ヲ以テ言ヒ三六日數

ニカレ故其歷年ノヒサシキヲ云ニ為何万歳幾千年
ノ數ヲ立タレ此約之^{三ノ數ニ隔セシムルヲ其要旨トノ}
コ者レベシ ○同神史ニ神代上神代下トアリ又神

世七代トアリ此世ト書代ト書ノ別如何 ○各代ハ
說文代更也漢公孫賀傳曰自大僕卿為宰相其子敬聲代父為大僕
皇統ノ次第ヲ以テ言ヒ世ハ父子ノ續次ヲ以テ言フノミ

○同神代トハ奈レ世ノ号ナリハ其旨ヲ得タリ然レバ
第一神武ノ御時ハ弟ニ綏靖ノタメノ神代ナレベキニ
鷓草葦不合尊ニテラ神代トシ神武天皇以後ヲ人代
トスル^{後世迄ノ通規トス}按レニ瓊々杵尊ヨリ三代

日向ニ都シ玉ヒ神武天皇ニ至ツテ東征シテ大和ニ都シテ
或ハタテ^{山城}抵津ニ都ノ^一モアレシ^ハ暫^ノクニテ
通ジテ大和ニ都シ玉フ^{日本書紀奏覽ノ}養老ノ時
ニ尚^然リコ^ヲ以テ日向ノ都以前ヲサシテ文物未備
質素朴實ノ旧都ノ代ト云茂ヲ以神代ト号シ神武
天皇ノ都シ玉フ大和ノ宮闕以後ヲ人代トコブモノ^平
一説ニ日本書紀ニモ寂初ニ祭ル代ナレバトテ神代上下
篇トハ立ラシタレ^{自國常立尊迄}伊弉諾尊伊
弉册尊是謂神世七代者也トアレハ天照大神以

前ヲ神世ト云ニヤサレハ古今和歌集序ニモ神代ニハ
奇ノ文字モサダマラススホコシテ言ノ葉ワキカタカ
リケラシ人ノ世トナリテスサノオノコトヨリゾミソジ
アマリヒトモジハヨモケルスサノオノコトハアマテス
オホニカミノコノカミナリト素
盞雄尊ヲ人ノ世ト書タルト伊勢諸尊文テヲ神世ト
カクレタルト其義同一ニシテ古書ノ旨ハ如是然レハ
尊以降モ神代下篇ト立ラレタルニハ別ニ意味アルカ
先達テイマダ其義ヲ論ゼス如何○答人皇ト云
古書ニ見ヘズ中古以後ノ書ニハ見ヘタリ異邦ニ天皇氏地

皇氏人皇氏ノ次弟アリ我大日本天照大神祚ヲ踐セ
五ヒシヨリ皇統連綿シテ其正孫ニアラサレハ天位ニ即ク
マタハズ是ヲ異邦ニ例セバ天皇氏ノマ、ニシテ地皇氏
ニウツラス况ヤ地皇氏ニ於テヤ故ニ百世ナラ天皇氏ノ
マ、ナレヲ以テ今ニ至ンマデ何ニ天皇ト号シ奉ルハ其
令ニモ明神御宇ナド、時ノ天子ノ変ヲ書キ其葉
集ニモ後ノ天子ノヲ唯神トカキテカミナガラト
讀セタルモ今ニ神代ノマ、ト云心明シ誠ニ神国ト号ス
ルヲ不亦宜キ

神史問答終

神代卷闕字傳

不知其術陽神從天道陰神從地道成夫婦之道如時有鵲鳩飛來搖其首尾二神見而與子之即得交道

朱点十六字一書欠文也

中國之字仿島矣其字佐島在海南儗以有秦教之使濤艱今在海北道中

朱点十六字上卷一書欠文也

今在吉備神部許也蓋謂八岐大地者素盞鳴尊

荒魂也所祭出雲歎之川上山是也

朱点十六字上卷一書欠文也

乃歸伏於之心不素心欲擬歸伏伺時奪天下謀露笋時出潮滿瓊

朱点十六字下卷一書欠文也

以昌恭本核出之者也

日本書紀神代卷一書辨書卷一

先初メニ皇統ノ次序ヲ述ベタトヒ第ニテモ位ヲ繼テ先ヘシ
ルニ細事ヲ不載帝事ヲ專要ニ紀シタレ故コレヲ神代卷
ノ縦トシ諾尊ノ崩御ハ天子ノ皇統ヘカレ故是ヲ縦ノ
卷ニ載セテ横ノ卷ニハ不載冊尊ノ崩御ハ母方ナレハ
皇統ヘカレガレヲ以テ横ノ卷ニ載テ縦ノ卷ニ不紀一段
高ク上テ書タレハ皇統ノ本文ニテ是ヲ紀トシ一段ヒキク下
テ一書曰ト書タレハ兄ハ兄弟ノ次第ト其實ノ次第ヲ紀テ
少ク錯乱セズ其實事ヲ載セ列子是ヲ横ノ卷トシテ

神代卷ノ縦横ヲ別キタルモノ也然ラハ古人神代卷ニ
一書トアルハ猶一説ニ曰クト云ニガ如シト注シ又ハ一書曰ハ
古来サマクノ傳書有リテソレヲ後人ノ考ヘノ為私ニ
事ヲ不変異説ヲモ書ナラベタルモノ也ト注シタル類ニ
今云所ニハ不當ニ似タルトモ一書曰ト云モノトカク其
皇統ニアツカル変ヲ本又トシ紀トシ異説古傳ノ書等
ノ内皇統ニアツカル変ハ少ケレバ捨ガタキ変有ルヲ拾ヒ
集メ是ヲ一書ト載セラレタル類ニ多シ一書ハ古書有ルハ
非ズ只一説ト云ベキヲ一書ト記サシタルヤウニ書タルハ非也

日本書紀全部ヲ考ルニ古書ノ説サマク引テ有リ何日
何日ナド有ル是ナリタトイキスクチハカトコハ伊弉宿祢博德書曰又ハ
百濟記曰ナド、記サシタル其外一書曰ト云モノ一書曰ク
一書云ク一云ク或云ク是ノ差別有リ其條下ニ論テ一
ク可弁一書ニハ飾リナク神代ノ實変ヲ記シタルモノ
ナレバ此書ノ本意ヲ探ルニハ一書ヲ以テ證トスベシ本又ハ
皇統ヲ表トシ文章ヲ儒書佛書ニテ飾リタルモノ
故ニ能ク是レヲ取捨セザレバ其正ヲ難得日本上代紀又
ナシ十八代履仲天皇ノ時始テ置史トアルハモノカキノ

役人ヲ置下云我ニテ記録ノ更ニハ推古三十四代推古天皇ノ
時聖德太子蘇我馬子等奉勅上代ヨリノ更實ヲ紀シ
タレ由ナレ此才三十六代皇極天皇四年蘇我入鹿被殺
トキ其父噉夷我が家ニ火シテ右ノ紀文悉ク燔ス船史
回教燼中ニ入テ其殘書少シ中取テ奉リタレ由日本紀
見ヘタリ是ニ依テ四十三代元明天皇和同七年紀朝臣
清人三宅藤麻呂等ニ勅シテ國史ヲ令撰ノ由續日本
紀ニ見ヘタリ是ヨリ先キ四十四代天武天皇ノ御時モ國史
ヲ被撰日本書紀ノ末ヲ可見然レハ天武天皇ノ御時

ニ撰シタレハ中臣ノ八嶋ヲ初メテ多クノ學者寄リテ撰
シタレモノ也是レ聖德太子ノ時ノ書絶タレ故ノ爲ナレ
比元明天皇其跡ヲツカシメテ右ノ通り和同七年ニ又紀氏
三宅氏等ノ儒者ニ命シテ是ヲ撰セシムル可成是ヲ清書
スレニ至テ文章ヲ飾ル更甚ダ花養ニ成リ博學ノ儒者
ナレヲ以テ多ク安万侶ヲ加ヘ表向ノ清書ノ文ヲ撰セ元來天
武天皇ノ叡慮ニテ古書ノ絶ヘタレヲ御再真ナシカケ
ラレシ取ヲ立テ天武天皇ノ王子ノ内高官ノ人ヲ且ラヒ一品
知大政官事舍人親王ヲシテ是ヲ鑒察セシメ奉行サセ玉

フ其書元正天皇ノ養老四年ニ成就シテ朝廷へ献上セ
ラル故ニ監察ノ人ノ名ノミヲ書テ續日本紀第八ニ是ヨリ
先キ一品舍人親王奉勅日本紀ヲ修ス是ニ至テ即成ル紀
三十卷系圖一卷ヲ奏スト云々舍人親王ノ撰ニテ八十シ
唐書百官志ニモ正觀之後多以宰相監修國史通成
故事也云々異國ニテモ此通りニテ唐ノ宰相ト云ハ大
臣ナリ是等ニ例シテ舍人親王知大政官事ナレ故修
史ノ事ヲ監セシメ五フト見ヘタリ日本書紀モ今傳フ
所三十卷ノ一二ヲ神代上下トス別ニ系圖有タレ凡
不傳ト云ニハ非ズ神武紀ヨリ以後ヨリテ三十卷トシ
神代ノ卷ヲ以テ其因テ来ル系圖ト可見事ハ委ク
縦ノ卷ノ初メニ見ヘタリ然レモ其系圖ト云ニ付テテ
表ノ系圖ノ立テヤウト實系ノ立テヤウトニフヲ分チ
一書ハ實系ノ系圖ノ立テヤウ也ト可見此縦横ノ道理
サハスメバ神代卷ノ意味ハ速ニスムナリ
○一書曰天地初判一物在於虛中狀貌難言其中
自有化生之神號國常立尊亦曰國底立尊
紀ノ卷ノ弁端ニモ如說此書元來漢文ニテ書タレモ

ニテ助字ヲ加へ上へ飯りテモ讀マウニシテ処ニ依テハ焉
哉乎也ノ文字ヲ用ヒ和讀ニセザレバ不可クノ分ハナシク
此ヲ十ニト云ト翻讀ノ例ヲ立テ是ヲ音注トス然レニ
巫祝等アヤシクヨミテ人ノ耳ヲ驚サシ為ニ悉ク和ヨ
ミニスル故ニキツリテ和ヨミト思ヒ梵語漢語ヲ加へ
タレ処々多シ若シ悉ク和ヨミニスベキモノナラハナシク
此ニ何ト云ト翻譯シタレ音注ハ何ノ為ニ付ラレベキヤ
能ク可察之コノ一書ノ中^{ウチ}虚中ノ二字ヲ盡理ニ和讀
ニサセクハ故虚ヲソラト訓シタリソラハ天ヲアソラ

ト云梵語ナリ却テ天ト云字ニハアハト云日本ノヨコ有
天ヲアト訓ス然レニ虚空ノ二字ヲ假ソラト訓シ又諸ヲソラト訓スソラ
虚ノ字和ヨミノ付カタ盡ク奥ニモ虚津彦ヲソラツ
梵語ニシテ而モ益相益類ヲ日本ニソラト云一語ノ字并ニ虚空ノ
ヒコト續セタリ津ノ字心ナシ三字ヲカケテウツヒコ
二字假ソラト云ニテ可得意然レバ天ノ字ヲソラトヨムハ後人ノ
ト可續レ也若シ虚中ヲモ強テ和ヨミニセバウツノ
讀誤リタルヘシ天ノ字ハ別ニ和訓アリ
十カニト可續レ一トシレ音ニテヨミテスム又ナリ天地
雜ニハトリテ^多家雜トヨム梵語クタ漢ニハ家雜也^テ
初判トイハレトテ天地ノワカルク一ニ非ズ天地トハ
ニ物其天地ノ間ノ虚中ニ在リ狀顔トリシメテ
云定メ難シ狀ハ直ニトウハタレ形ニ非ズ其体ヲ云
ニ立テ見書キ立テ見ル心ノ字ニテ人ノ一生ノ一ヲ書ク

行狀ト云ニテ可得意顔ハ容貌ト續キ直ニ見ル形
ナリ云ニイハズ見ニ不被見其ノ容貌絶言語ヲ
ハ即日ノ徳ニシテ天地ノ間ニ一ツノ物是也其日徳ノ
陽中ヨリ化生スルモノ多シト云ハ凡其長トナレモ
ノハ人也人ノ生スル所ノ徳ヲ集メ頭ニ立テ是ヲ司ル
ヲ名テ國常立ト云荀悅ガ申鑒ニ惟審九風以國
常ト云文有リテ王者ノ徳ノ一トス同ジ書ニ人至
之患常立於二難之間ニ然レハ上ニ引ク所ノ國
常ノ文字此ニ引所ノ常立ノ文字國常立ノ起

原可成國名常立勝福ト法華經中四卷人記云ニ
カ、セ五(ニ)モ古キ一ニテヤル儒佛ノ文字ヨリ取テ
蓋シ奉んモノト見(タリ)日徳ヨリ化生シテ人数多
アリノ天地アレバ人有り然レハ是ヲ司ルト云ホドノ
事奪リシニ諾尊ノ御先祖一統ト云ホドニハ意ク
少シノ御司リモ在リテ人ヲ導キ取ク其化徳御
子孫ニ傳ハリテ諾尊冊尊是レヲ大キニ関キ天
照大神ニ至テ今ノ西國北國四國九郡ニ至マテ
一統シ取ク神武天皇ニ至テ大和山城ノ邊悉ク是

ヲ從へ十二代景行天皇ニ至テ東國ヲ從へ吾ク其證也
ハ武内宿祢ヲシテ東國ノ限リヲ見セコソカハカレシ
クニ總刀加ノ邊ノ一ヲ乱髮ニシテ衣服ヲ着スル
ヲ不知ト云文アリノ天照大神ノ御先祖モ人也其人
ノ中ニテ徳有テ他人ニモ用ヒラシ吾ク是ヲ御子孫
ヨリ直ニ日徳ノ神靈ト敬ヒ右ニ云如ク法華經
及申鑒等ノ文字ヲ以テ證シ奉んトシ(タリ直ニ
其時國常立ト名ケタ人直ニハ非ス万物ノ生ス
ルハ天地日徳ノ化ナリ其化ニ依テ形ヲナスユヘ

化生ノ二字ヲ用ユ是ヨリ段々(化生ノ二字ヲ俱生ト
記シ又ハ生)ノ字一字ヲ書キ化主ニカ、ラズ直ニ(神人
有ト書キ又化)爲ノ二字ニ改メ又生於(空中ト
書キカヤリ)ニ書キカ(タレ所)ガ一書ノ一説宛也
是ニテ文字ノ學文ガ本ニテ和ヨシニスルハ後ノ了ト可
合点右國常立尊亦ハ國底立尊ト云ハ日徳ナレバ
地へ徹底シテイワ迄モ及ズベカラザルノ徳御子孫
モ其如ク天地ノ間ノ主トナリ万世徹底シテ政
ヲトリ取クベキ徳ノ号也ト云説アリ也(亦曰トアリ)

古来ノ一ニテ文字ハ益ク口傳ニコリクニテ拾ヒ集
クシバ文字定リテ謚シ奉リテ七一統ニ此者ナリモ
ナキモノ故誤リ云ヒテ常立ヲソコタナト是ヘクニ
謚言可成カマウノ僅ノ子ガヒライリホガニ説ヲナ
ハ僻^{サツチ}也 ○次國^{サツチ}狹^{サツチ}捷^{サツチ}尊亦曰國^{サツチ}狹^{サツチ}立^{サツチ}尊 是ハ
紀ニ見ヘクニ通りユヘ歎スルコト不及國狹立尊ハ捷ト立
トタナツテトノ通音ヨリ誤リクニ也是ニサツチノ
説^{トヨクシヌ}ア^{トヨクシヌ}レ^{トヨクシヌ}ハ不可用 ○次^{トヨクシヌ}豊國^{トヨクシヌ}主^{トヨクシヌ}尊 トヨクシヌト可^{トヨクシヌ}續
下畧ノ詞多シ是モ紀ノ通り也文字ヲ改テ書クニコノ

御子孫終ニ豊葦原ノ國ノ主ト成リユクヘキ御德御先
祖ヨリ善ヲ積ムノ余慶ヲ込タニ書ヤウ也 ○亦曰^{トヨ}豊^{トヨ}
組野^{クシノ}尊^ト 是モ轉語ニテトヨクシノト可^{トヨクシヌ}統^{トヨクシヌ}クミトツマ
テハ不可^{トヨクシヌ}統^{トヨクシヌ}万葉書ノカキ傳ヘクニカハリメヲ載クニ迄也
○亦曰^{トヨ}豊^{トヨ}香^{トヨ}節^{トヨ}野^{トヨ}尊^{トヨ} 全体國常立ヨリ豊組野ニテ
三代ハ日輪ノ德ノ喻事ナルヨレ紀ノ本文ニ委ク歎ス日
輪ハ火德ナリ一切ノ香気ハ火ニ依テアラハレフスボルト云モ
火ニ依テナス切ナリ日德ノ面ヘ能クアラハレト云德ヲ謚
ニシ奉リ一説ヲセタリ節ハフスボルノ下畧ノ轉語ナリ

○亦曰浮^{ウキ}經^{フノ}野^{トヨ}豐^{カヒ}買^ト尊^ト ウクト云七陽ナレ故ウク也フト
云七年ヲ經ルナド云時ツカフ詞已ニ天照大神ノ御先祖
其陽德淳テ民ヲ可^キ導^クノ德年々ヲ經テ天ノ日德ノ体
用ノニツヲ兼子備^ヘ来リテ心ヲ豊^ク買^ト尊^ト謚^シ奉^ル
モノ也豐ノ一前^ヘニ有リ天ノ日德ノ用ヲカト云ヒカ、グ
カ、ヤクカザスカタチカヅフカゲカラスカスム三日四日ノカ
ニテ可^ク合^ス点^ス日德ノ体ヲヒト云フ此ヒノ德ヲ以テヒラクヒ
シナリ、云詞起ル是ヲ合セテカヒト云フトヨカヒノ買^トノ字
ハカリニ訓ヲカリタム也 ○亦曰豐^{トヨ}國^{クニ}野^ノ尊^ト 是ハトヨ

クニノ、轉語ニテ也 ○亦曰豐^{トヨ}留^{クヒ}野^ノ尊^ト 是モ轉語ニテ心ハ
ナシ幾ヲ以テ終スル僻事也 ○亦曰葉^ハ木^キ國^{クニ}野^ノ尊^ト
葉モ木モ陽ニ属ス但木ト云ヘキニ葉ノ字ヲソクタルハト
キハギノ常ニ其葉ヲ^ア魁^{スル}心アリ然レハ常ニ立ノトコト
通フ國野ハクニヌノ轉語也ハコト置クルカ異說ニテ古
来ヨリノ轉語ナリ深キ幾ハナシ一書曰ト書出し其ウチ
ニ亦曰トアルハ別ノ書ニ有ルニテハ無シ一書ヲ拾ヒ集テ
ノセタム也一曰トアルハ同シ一書ノ内ニテモ外ノ書ヲ引タム
也或云トアルハ難信用說ナシ凡引トノ心ナリ是ヲ合ケテ

心得見べし ○亦曰見野尊 上豊組野ト有ル上畧ノ
詞ニテ是ニ七深キ我ハナシカヤウノ我ヲ深ク探シハ悉
ク新説ヲ思ヒ付テ疑ス々ウニ成リ本書ノ我ヲ失フ
ト多シ所要ノ文ニ心ヲ入シ異説等ノ文ニハカレバカラス
○一書曰古國クニ雅地イハレシ雅之時トキ 此一書ハ伊岐博徳ガ書ニ
依テ書クモノ也ト云説アリ然レ其本書不傳ユヘ
難変古國雅地雅コノ古ハ太古ニシテ天地混沌未分
ノ時ヲサス可成スベテ混沌ノ説ハ老子ニ初リ天地開闢
ノ次第ヲ説クハ前漢ノ淮南王劉安ニ初ル是ハ漢高祖
ノ孫ナレ故王ニ封セラレ淮南子ト云書ヲ傳フヲレヨリ以後
ノ書ニハ天地開闢ノ事多シ故ニ此書ノ發端ニモ淮南子
天文訓ノ篇ノ文ヲ引テ書レタリ是ヨリ古キ書ニモ益キ
故ナリ千古猶今日ノ如ク何ソ開闢ノ時有ニヤ但是
陰陽消息ノ理ヲ以テカリニ書クモノト見ヘタリ天地ハ
實ニ無始無終也ト云ヘ凡國ニ依テ文物ノ早ク開ケル
ト早ク開ケガレトニ遅速ハ可有古ト云字ヲ混沌未分
ト云モカリニ本文ノ意ニ就テ迷ルマデ也古ノ字ニ未分
ヲ込メステニ合レタレ時國モワカク人ニテ云ク幼雅成

カ如クモノ定ラガハ時ニト云心ナリ是等ハ音ニテ難讀
 推ヲイシト詭セタルハ一切ノモノワカキ時ハ味マハラカシ
 テヨシ後世食品ヲイシヒト云詞アルモハラカニワカキ心
 ナリ ○譬猶浮膏而漂蕩于時國中生物トキニクニナカニセリモ 又トハ
 ト云ヒナラト云ヒ實ニ此通りニテハ盡シ後ヨリ推量シテ
 陰陽ノ理ニカケテ見タルハ天地ワカクシテカタリ
 ガタクト云ベキニ天ハ清陽ナル故カタマニ理ナシ地ハ
 陰濁ナル故カタマニベキニ國トカキル一モ盡ク誰ガ
 地ト定ル一モ盡クシテ國イシ地イシノ符ハタトハ浮
 膏ノ如ク漂蕩ト何レハ凡カタ付カタキ心可成油ノ
 字ヲ不書膏ノ字ヲ書タルハ次弟ニ日徳ノ印ニテカ
 タマニベキ也又トフ膏藥ヲ火ニカケタルガゴトク
 煉リフムル迄ハタマヨヘンガ如クナシ凡イワカタマニ
 凡ナク時ニ天地ノ間物ヲ生ズトノ也是モ喻ヘテ
 云一故年ニトリ得カタキカ多キ 狀ト云字ヲ書タリ
 ○狀如葦牙之抽出也 紀ノ初タニ葦牙ノ一委ク并
 ス是ノ一説ハ抽出タルト云二字ニ在リアシカヒノ又テ出
 テ其生氣イワ返セヤムニシキノ心ニタトヘタリ

○因此有化生之神ヨリユル 因ノ字古本神代卷及ビ類聚國
史神代卷何レモ自ノ字ニ作ルコレヨリト可訓アリカ
イノ又ケ出ル徳ヨリ自然ト化生スルノ神ト云々ナリ
○號可美葦牙彦舅尊ウツミアシノカヘヒコノミヤノ 是ハ下ニ音洋アハ故ウミシト
ヨム文字ニ秋スレハ勢字也天地ノ生氣勢ハシタニ依テ
アリカイノ抽出タレガ如ク人ヲ生スルノ徳成就スルニ
證シテ彦舅尊ト云フ彦ハ男子ヲ獲ルノ号和語
ニテ云片ハ日子ノ二字ニアタニ ○次國常立尊トコタテノミヤノ 次國
狹捷尊サツツクノミヤノ 葉本國ヨツモトノクニ 此云播舉矩爾可美ハコトコトコトコト 此云于麻時

神名ノリ前ニアリ古語拾遺十トノ書方是ニ依テ國ノ
常立ヨリ前ニ神ヲ立ヌリ天ニ人ヲ生ズルノ徳アルヲヒコ
トト云ヒ地ニ其レヲ受テ人ヲ生ズルノ徳アルヲクニトコ
タケト云フ人其天地ノ異ニ依テ生ズル徳ヲクニノサツツク
ト云フ共ニ日徳ニシテ三ノ數ニテ書タリ此立ヤリ本文
トハ大ニ相違スレ凡縮ル所ハ同シ義ナリ以下ハ上ノ一段
ト此段トヲ合セタニ音注ナリ ○一書曰天地混成之アメノチホカレタル
時始有神人焉號可美葦牙彦舅尊次國底立尊トキノミヤノ
尊彦舅此云比古尼タケノミヤノ 天地混成ノ文字老子ニアリ

混沌タムカト思ハバ也ニ天地成就シテアルノ義始ノ字ヲ
ハジメテト可説カラズハジメヨリト可説天地アルヤ否也
メヨリ神モ人モアル也此神ハ造化ノ神ニテ天ニ日有
ルヲ云フ人ハ其日徳ニ依テ生ズル故神人ノ二字ヲ連子
タリ神人ト音ニテ可説俗点二字ヲ列子テカミト説
テ人ノ字義スズ國底立ハ國常立ノ轉語ニテ下ノ
文ヲ畧シタムモノ也己下ハ音注 ○一書曰天地初判始
有俱生之神彌國常立尊次國狹捷尊 是モ
始ノ字ヲハジメヨリト可説天地開闢アレバ即人物万物

モアリトノ義ニテ俱生ノ二字ヲツカヒタリ國常立國狹捷
如文 ○又曰高天原所生神名曰天御中主尊次高
皇產靈尊次神皇產靈尊皇產靈此云美武須毗
コノ又曰ハ亦曰ノ亦トハ遷ヒ一向別段ノ説ト云義ナリ
亦ノ字ヨリ段ヲ分ツリ重シサホドノ一ナクテ文
字分ケツカフベキヤリ無シ高天原紀ノ本文ニ委ク釈
シテ前後ノ文ノ体ニ依テ只十ニト十ク天ノ一ニモ成
都ノ一ニモ成リ清淨成ルム子ヲモサス是ノ高天
原ハサス所ナシ但可尊ノ所ト云ベキニ名ノワケヤウ

ナキ故高天原ト置タリ其可尊所ニアレシス神名三
段ニ分ツ一横ノ卷ノ中ニテノ秘事ノ一ツ也天ニ日ヲ生
シ日ニナラシテ月ヲ生シ日月全フシテ其余光星ト
ナル是ニタトヘテ三神ノ名ヲ分ケタルモノ也天ニ御中
主トアホガルベキハ日也天子ノ御先祖ヲ日ニタトヘテ
御中主ト拜シタトヘ皇族ニテモ臣下ニテモ天子ノ御外
祖タル人ノ靈ヲ祀テハ高皇産靈尊ト名ケタルヘ皇
族ニモセヨ臣下ニモセヨ朝庭ノ列臣トナリテハ是ヲ
神皇産靈尊ト祀ル其祀ル所ハ一ニシテ日徳也日徳

ヨリ月ニ光リヲ生シ星ニ光リヲ生スルガ如ク己ニ伊勢
外宮ハ瓊々杵尊ニテニシテセバ國常立尊ト合祭ス天子
ハ是ヲ天御中主ト拜シユフ皇后ハ是ヲ高皇産靈尊
ト拜シユヒ臣下ハ是ヲ神皇産靈尊ト拜シ奉ル事
習ヒ也高皇産靈御外祖ナル一ハ委ク紀ノ本文下
卷ノ初ニ見ヘタリ神代卷ニ所説高皇産靈ハ月讀
尊ナリ猶紀ノ本文ノ叙ニテ可考以下音注
○一書曰天地未生之時譬猶海上浮雲無所根係
天地ノ生ゼガルト云フ我ハナシ勢セサルノ時ナルベシ是ヲ

夕トヘ取テ海上浮雲ノ如ク無所根係落着セザル
喻万葉集亦七大海ニ嶋モアラナクニ海原ノ夕ニ夕
波ニ夕テハ白雲ト読ルガ如ク雲ノカニベキ嶋モ山モ
キニ夕トヘ夕リ仲尼ノ不義ノ富貴ヲ浮雲ニ夕トヘ
夕トヘ可ク解古本類聚國史ノ神代卷俱ニ浮雲ニ
作ル俗本浮雲ニ作り其誤リ久ク一条兼良公ノ本ニ
サヘ浮雲ノ文字ニ夕テ秋セラレ夕リ亦一浮雲ト云熟
字ナレウカメルト読テハスマザル故浮ノ字ヲフルト付夕
リ浮ノ字フルト云訓何ク以テ可ク付ヤ海上ノ雪ト云

題ニテ定家卿ハオシキガフアレノカレバ夕使リニテ
波ノウヘニモ夕モル白雪浮雲ニカニル所不可有雪
ハワヅカノ物ニモ可ク積雲ノ根トハ哥ノニモ読メ凡雪ノ
根ト云詞ハ可有_一ニモ不覺浮雲ハ浮雲ニ可ク改

○其中生一物 是ハオニノ一書ノウカメル膏ト夕トヘ夕
書ヤリト夕ナリ合セ可ク見 ○如葦牙之初生_{ヒチノナカ}泥中_{アヒカヒノ}也

泥中ヲヒチノナカト可ク訓其日德泥中ニカタマリ其德
ヨリ化シテ人ヲ生ナリ ○使化_{チケレテナスヒトヲ}爲人 化爲ノ二字ケレ
テ人ヲナスト可ク読 ○號國常立尊_ト 文ノゴトシ

○一書曰天地初判有物若葦牙フメツケ金ニルトキ生於空中ソラノナカ因此化神イハカミ
號天常立尊次可美葦牙ウミシ彦舅尊アヒカイヒコ是ハ天地ノ初判ヨリ葦牙ノ如キ一物空中ニ自在スルニ依テ其化ニ依テ人物万物生スト之説キヤウ也外ニ口傳ナシ生於空中ノ生ノ字俗本誤レリ古本及ヒ類聚國史ノ本在於空中ニ作ル自然下葦牙ノ如キ氣空中ニ在リテト云心ニテアシハ繁茂シ易キ物故初ハ僅ナシ任人物万物任ニ次ハ繁茂スベキ氣ヲ含テ天地ノ間ニ自在スソシニ依テ化スル神ヲ天常立尊ト云トノ義ナリソレ故此所ノ因此ノ二字

古本トモニ自ニハ不作其人物万物ヲ繁茂スベキ天ノ徳ハ日ナリ其日徳ヲ名テ永代出テ盈テ欠テスル義ナキユヘニ常立ノ名ヲ用ヒ其徳熟シテ地ニ下テ人ノ祖ト成ル是ヲ可美葦牙彦舅ト云ニ
○又曰有物若浮膏生於空中ソラノナカ又有ノ間ニ類聚國史ノ本曰ノ字アリ補ヒ可入是ノ一書ノ中ニテ又格別ノ説トノ義ナリ有物ハ初ノ説ト同シテ任葦ニタトヘズシテ浮膏ニタトヘ膏ハ水ノ如クナシ任火徳ヲ以テ終ニカタマレガ如ク人物万物任ニ成就スベシトタトヘタリ
○因此化神號

國常立尊ト 是そ其カタマリ得たる所ノ万物人物ハ
日徳ノ化ナレバトテ帝王ト 元祖ヲ日ニ准ヘテ國ノ常立
ノ尊ト謚シ奉ル上古人其名傳ハルベキヤウナレ相應ニ
徳ヲ考ヘテ謚シ奉ルモノ也其生日ハ人ナリ謚ヲ奉テ
祀ル日ハ神也人物ノ外ニ神ト云モノ有ニテハ無シ

○一書曰此二神アラカシキ子ノ青檀城根尊之子也 是ノ二神是ハ紀
ニ諾尊冊尊トトメタル故ソレヘツギタル文ニテ紀ノ本文
ヘ直ニ書入ルベキトナレハ紀ニハ面足惶根ニ神ヲ親トシ
テ其面足惶根ノ子ヲ諾冊ノ二神トスル故紀ヘ書入シ

カタシ紀ノ本文面足惶根ノ下ニ亦ハ青檀城根尊ト
ニ一有リソノ例ニテ此神名ヲ書出し青檀城根尊
ハ母ニ立タル紀ノ書キヤウ故此ノ神ノ産出しユウニ紛
レナク造化ヲ以テ斗リ不可説胎生ニシテテ人物ナ
一ヲタシカニ知セタルモノ也 ○一書曰國常立尊生
天鏡尊アマヤミノ天鏡尊生天萬尊アマヨロフ天萬尊生沫蕩尊アマナギノ
沫蕩尊生伊弉諾尊イハタノ沫蕩此云阿和那伎アハナギト
コノ一書ハ殊外大事ノ説アル一書也國常立尊ハ日輪
全体ナリ此日輪三徳ニ合ケテ天下ヲ照ス徳リ名テ天

鏡ノ尊ヲ生スト書キ天鏡尊ヨリ天鏡尊ヲ生スト書
タリ天萬アマヨロフハ方物ナリ万物有テモ照ス所ノ鏡ナケレバ人
草畜ソウ菓木木林羅万像相分フヲ得ズ是ヲ分ケテ民ノ
為ニ惠ミテ十ス一玉ノ德ノ如ク其天萬尊ヨリ生
沫蕩アハナギノ尊ヲキテ沫蕩ハ海上ノ平安ニ凡モナギテ静ル
貞也日ノ光リ鏡ト成テ万物ヲ照セ任其化ニ不服治
リガタキ時ハ沫蕩ノ理ニ非ズイガナギ諾ト云御名モイザハ
人ヲサソウ詞ナグハ平ラカニシテ民ノ不背ヤリニ治ル
義故ニ神別記ニハ古來平ト書タリソシモ我カ威勢

ヲ以テヲシテナグニ非ズ我カ德ニ化セラレテ先キヨリ
諾ダクシテ從フ故諾ノ字ヲ書テナギトヨメセタリノ草ナギノ
ケシノ名モ君子ノ德ハ凡也ノ草ソウ蕩也此所ノ沫蕩モ日德
能ク賞罰ヲ照シ善惡ヲ明メワカチ天万ノ人民ヲ照シ
是ヲ海上ノナギタルヤリニ治ル德ヲ三ツニ分ケテ其本ハ
國ノ常立ノ尊ニ撰シフニ所ハ御先祖國常立尊ト
謚スル人是ノ天ノ日德ノ如ク三德備リタル故ソレヨリ
段々能キ人生レ傳ヘ直ニ日德ヲサモカズ四滿ニ護
持シテ生レ五ク天照大神ト謚スル人生レ五ヒ天子ノ大祖

トアホガレ五七此日徳田満ノ御子ヲモリ育テ五ノ御
父母ノ靈ヲ日護木^{ヒモロキ}云日徳ヲモルノ木ト云茂ニテ又日本
書紀ノ内ニ母ノ字ヲモロト讀セクハ所アリ武母住ト^{タケモロスミ}
見ヘタリ然レハ母ノ字ヲモロトヨムハ日神トアガメ奉
ヘ天照大神ノ御母ノ靈ヲ祀ル為ニ賢木ヲ植タル所ヲ
日母木^{ヒモロキ}云ベシト部家其外諸流日護木傳トテサソクノ
異説ヲ指ヘ人ヲ偽ル類ヒ多シ而モ極秘傳トシテ容易ニ
ハ不傳吉田家ニハ真鍮細工ニテ道具ヲ指ヘ是レ神代ヨリ
傳ハリタル日護木磐坂ト云テ日本第一ノ神宝成ル由ヲ

云ヒ立ニシテ愚祝ヲシテ黄金ヲ貪ムノ基トス林道春ノ
書シタル吉田ノ事書判行ニ有リ二條通りノ真鍮屋ニテ
指ヘタル一委クノセタリ又可不耻乎其ヒモロギト
ウヤハシテクベキ諾尊冊尊ノ生シテハ御先祖ヨリ彼
ノ三徳ヲ守リ来リテウテ故如是ノ聖人モ生シテト次子
シテ書クモノ也其上此神代卷ハ畢竟三種神器ノ縁
起ニシテ此神器ヲ傳ヘサレバ天子ト難成故ニ三種ノ神器
ノ鏡劔玉ノ徳ヲ天ノ日徳ニ表シテ何トナク此所ニ書
出シテ置タルモノ也始終神器ノ縁起ヲ書ク為ナリ△

或儒者問曰諾尊冊尊ノ時代學問ト云フ不可有何ニ依テ
カ鏡ト云ヒ玉ト云ヒ劍ト云フ其根ヲ神ノ名ニ設キ予神名ハ謚ニモ
セヨ日本神代無此ノ國也何フ其理有ニ乎予答曰八卦
ヲ畫ス是ヨリ後ハ花ヲ見テハ花ノ形ヲ書キ虫ヲ見テハ虫
ノ形ヲ書テ段々巧者ニ成リテ文字ト云モテノヲ製スソシ
モ今ノ真字ナドハ違カ後ノ一也伏羲神農黃帝堯舜
ナドニ讀セタリ此一字モ讀ガタカニシ然レバトテ聖人ニテ意
シトハ云レズ理ハ天地ノ間ニアリ物ハ是ヲ亦凡智アリ人ハ
自然ト云ル智ヲ備タレ故人ヲシテ万物ノ長トハイヘリ

神代文字ナキニ依テ人モ質素ニシテ文物同クベカラザレ凡
其中ニ理ノサトキヲ以テ帝王氏アガメタレ可成以下音注也
○一書曰男女耦生之神 是ノ書ハ本文允八神ノ下ニハ不
相應也前ノ一書天鏡ノ尊ノ次ニ有ニ一書也日本書紀古來ハ
卷物ニテ如今判本ハ無リシ故或ハ續損シタレ一モアリ
是ヲ以テ文段ノ前後シタレ一問々多シ男女耦生ト造
化ニテハナレシカト人体ニシテ證極ニ男女ノ二字ヲ書キ耦
生ハ耦而耕ト論語ニモアリ此時向ヒ合セテ耕ス心也然
レハ夫婦ト可成神相對シテ生ルトイフ也今ノ点本耦

生ヲタクヒナレト付又ハ耦ノ字ニ義不合 ○先有溼土
ニノ スヒチニノ
 煮尊沙土煮尊 先ハ才一ニト云義也神名紀ノ紀ニ委
 ノ述タレハ畧之 ○次有角檝尊活檝尊 角檝ハ紀
 大戸之道尊大若邊尊ト有ルニアタニ紀ニモ紀スル如ク此
 神ハ全クニアテ、物ノ骨ヲ生ズル徳ニ准テ付又ハ号ナリ
 角ニ七檝ニ骨ノ心アリ活檝是モ其骨働テ万物ノ根
 トナル心ニテ大若邊ニアタニ ○次有面足尊惶根尊
 次有伊弉諾尊伊弉册尊 以上紀ノ紀ニ委ニ無別義
 ○檝檝也 是ハ康保ノ私記ニ有ル注ニテ本文ニアラス
 後人其注ヲ下ニ書オキ又ハガ紛レテ此ニ入りタニ可成是
 ヲ除クベシ

神代卷一書并書一之終

神代卷一書辨書卷之二

○一書曰天神謂伊弉諾尊伊弉册尊曰 紀三初ヨリ
諾尊册尊ト書出シテ天ノ神ノ命令ヲ受テト云ヌヲ
不載此一書ハ諾尊册尊天命ヲ受テ事ヲ始メヌヲヤリニ
カキテ私ニハカリ玉ハサレ證トシクモモノニテ天神トテ
別ニ神在テソレヨリ命ヲ受テ成シヌクニハ非ズ諾尊册尊
天下ノ一統セザルヲウレヘモヒ先ツ一ツノ嶋ナリ臣ニ化セ
ト思石スニ如何カシテカ徳ニ化セシヤトカク日輪ノ私ニ
照タリナク公ナレ光明ノ道理ヲ佛志トシ玉ハ、一ツノ

嶋ヨリ始テ天下王化ニ可從ト思名ス御心ガ別天神也
文字ニテ新スル時ハ天ノ神ハ日也日ヲ尊ミ其日ノ道理
ヲ從ヒテ政ヲ執ラハヤト思名スラ天ノ神ノ勅ノヤウニ書
タリ ○有^{トヨク}豊葦原千五百秋 豊^{ホギコト}ハ奉詞ト云モ也
ホキコト又ヨゴト凡ヨム物ヲ祝シテ云ヲホキコト凡ヨゴト
凡ニリアリハラト云ニ為ノ枕詞也ト洋シタルハ非ナリ枕
詞ニ非ズソシ枕詞ト云ハヒサカタノアメアラカ子ノツチ
アレビキノ山ナドヲ枕詞ト云フ豊葦原トツキタニハ
アレハラヲ祝シタル詞神代卷ニモ空見津大和國ト
云フ有リ空見津大和國ヲ祝シタル詞也此類ト可知
葦原アレハ僅ナルヨリ次才ニ繁茂シテ盛ニナルモノユ
國ヲ祝スル詞千五百秋コレラハ音注ナク凡漢語ニテ
ハ讀ガタシ訓ノ例ハ予ガイロハノ訓多ニ見ヘタリ
○瑞穂之地 ^{ミヅハミヅク}ミヅハミヅクシク潤ヘル負五穀ノ穂ノ
ミヅクシクシテ繁昌スベキ地アリト云フ也一説ニ瑞穂
ハ水火相備ヘタル國ト云ヌトノ類有リ今不用之
○宜汝往循之 ^{ヨロシクエシテチイハサム}汝ハサレ示ス詞汝ノ字俗点ニイマシト
付タルハ非ナリ書經ニ乃聖乃神トアリ此ノ乃ノ字所

ヨリテナシキハヨニス字也ソレヨリ汝ノイテト云トワ
也トモヒクヌト見ヘタリ別義也往循ハ循ハ古本ニ備
作ル往テ可レ終ノ義ナリ日ノ勅シテヤウニ書ヌルモノナリ

○^{ヌルナラ} 酒賜 古本類史ノ本ハニ亦ニ作ル何カ是ナラニ年然レ

古本ニ可レ從 ○^{アホコラ} 天瓊戈 トボコト不説一紀ノ新ニ委シ

日輪ノ徳ヲ指テ云哥ニモ玉ボユノ道ト云ハ日ノ道也其日ノ
戈ヲ給ハント云ハ御夫婦ニ日輪ノ徳ノ如クニ御志ヲ
定メテウレ也今ニ至テモ遠近三都ノ間ノ下々ノ詞ニ志ノ少
キヲホコガ少キト云リ上代ノ詞ノ殘リタル可レ成

○^{コニ} 於是ニ神立^{タレテ}於^{アツク}天上浮橋 紀ニ天上ノ上ノ字ナシ直ニ天

浮橋ト書タリ上ノ字有レガ一説ナレバアメノウヘノト可レ統俗
學者本文ト相違スルヲ云ノドクニ思ヒ上ノ字ヲ省テ説
ハ縦横ノ釈ヲ不知故也紀ニ七釈スル如ク此アメト云ハ久
遠ノイニテ今日ヨリ斗リガタキ、祥ノイ也久方ノアメト
云久方ニテ可レ合点上ノ字ハ久遠ノ上古ト云義ヲ必メタリ
浮橋ハイマダ取シマラズ然レハ向ヘ可渡ノ道スギノ付
タレ初也初ノ字ヲウイト競ムウイカウフリ又ハウイ
シキ皆初ノイ也又遠ノ上古ウイシキ初メ御志ヲ

嘯ヒラキ

立ヒラキ五ク所ガ民ヲ化シ五クベキハシダテト成リタルヒラキ譬嘯ノ

語ナリ ○サレバ投サレバ戈サレバ求サレバ地サレバ 紀サレバハ指サレバ下サレバトアリ此志サレバニテ民化

スベキヤ否ヤト投テ見五ク我々トヘバ釣針ヲ投テ魚ヲ

求ルガ如ク日徳ヲ投テ化スベキノ國ヲ求メ五クナリ

○因サレバ盡サレバ滄海 物サレバハ限リナクシテハ取サレバシテリ無シ滄海ノ

中サレバニ一嶋ヲ限リテ御徳ヲムケテ見五クノ我々ナリ

○而サレバ引サレバ舉サレバ之サレバ即サレバ戈サレバ鋒サレバ垂サレバ落サレバ之サレバ潮サレバ結サレバ而サレバ爲サレバ嶋サレバ名サレバ

曰サレバ磯サレバ馭サレバ盧サレバ嶋サレバ ヒキアグルトハ不可サレバ説サレバ民ヲ引サレバテ其善サレバ

者サレバヲアゲ其惡サレバキ者サレバヲコラシメ五ク日サレバモ万物サレバヲ生サレバスル

徳アリ万物ヲ枯ス所アリ其徳ニ別リ賞罰ヲ明サレバシ五

ハ則チ其日徳ノ戈サレバサキヨリシタマルシホト云々也文章

ニテ戈ト書タルニ垂落之潮ト云テ書タリ其日徳ノ

如キ御志ヲ下民ニ惠サレバシクシ五サレバハバ夕トヘバ潮ノ工サレバルガ如ク

民ノ心ガカタヘリテ御徳化サレバニ皈サレバシ一サレバシテリノ御領地ト

成サレバん此時嶋ノ生サレバシタルニハ本ヨリ嶋モ人モ在サレバリ嶋モ

人モ在サレバリテモ人畜ノ差別無シ於此始テ王化ニ從サレバフト

シテリト成サレバん何故一サレバシテリトナリタルバ日徳ノ大陽ノ

徳ニ象サレバリテ指サレバ向サレバテ五ク御志サレバヨリ得サレバ五ク嶋サレバナレバトテ

名テ陽嶋ト云也口ハ和語也中臣被ニ神ロギト云口ト
曰ジオノコ嶋ト云受ハ大陽男徳ヲ以テ得テト云心
元来男ノ字ノ訓オホク又ホコ畧シテオノコ也女ハアフ
ムク^{ウチ}海ト云ヲ畧シテアフウ十天地造化ノ陰陽モ此
理天ノ陽徳ヲ覆テ日徳ノ又ボコヲオロセバアフムク
海上ニ其氣ヲ交テ嶋ヲ生ズ男女夫婦ノ義モ男ハ覆
テ又ホコヲオロシ女ハアフムヒテ是ヲ交子ヲ生ス男女ノ
訓ハ古来ヨリ秘訓ナリトテ何レノ書ニモ疑ト不傳ハ
ソレニ也此陽嶋ヲ以テ本トシテ倭子孫六十六國ニ嶋

一テヲ領シ五ハ日徳ヲ本トスルニ依テ日本ノ名モアリ陽
嶋ハウムトナシ紀ニモ獲テト書キ此段ニモ為嶋トナリ
書タリ日本ノ物ニ名ノ付ケヤウノ始メ也^ユ何^ナクニ依リテ
名テ陽嶋ト云ト云是ニテ可^ニ合^ニ点^ニ此心得ニテ和語ヲ可^ニ教^ニ
○二神^{アノタリ}降^リ居^ス彼嶋^ニ化作^ス八尋^ノ之殿^ニ 諾尊^ノ冊^ノ何^ノ方^ニ
ニテ御出生有リシヤ^ニ雅^ニ知^ル崩^レ御^ハ諾^尊ハ淡路ノ國冊^ノ
尊ハ出雲伯耆ノ堺日^ノ婆^ノ山^ナル^ル古事記ニ見タリ彼ノ
陽嶋ニ來リ玉ヒテ八尋ノ殿ヲ被^レ立^テ化作ノ二字ミタツ
ト読ハ古事記ナドニ見立トアルハ見ノ字漢文ニテラレ

ト読スリ有りハ尋ノ殿ヲ立ラシト云心也語リテミタ
ト読シヨリ此所ヘモ其点ヲモテキテ付タレト見(タリ
類史ノ本ニ作ノ字ヲ為ニ作ル為ノ方宜シハ尋ノ
殿ノ一伊勢流ニテハ社ノ初メニテヤヒロヲ轉シテヤシロ
ト訓シ来ルト云ハ儻事ヲ成ソレハ善理ニ神代ハ
存生ノ時モ皆神ナリト思フ怪異ノ説也又化作ノ
ニテ此諾冊ニ神ハ造化ノ陰陽ノ一ニテ非又体ハ
空中ニ住セテ神靈ヲ名テハ尋之殿ト云故化作ノ
化ハ造化ノ化也ト一説アリ猶以テ非也十八代履仲

天皇ノ卷六年ノ条下ニ天子ノ御所ヲハ尋殿ト書キ
タレテアリハ尋ハ大ナルノ詞民ヲ化シテ甚化セラレタ
民諾冊ノ尊ノ御所ヲ立テタレハ尋ノ殿トカキ
クモレ也タト(バ文王ノ園ヲ民是ヲ立んと王化ニ服シ
テ予カラテ令セシト曰じ文体ヲ成此時大ナル御殿ニ
テハ不可有凡尊ニテ書クモレ也 ○又化^{クニテタウアラスミカカ}堅^カ天柱^{カカ}陽神
閻陰神^{カカ}曰 天柱ハ紀ノ國中柱トアルト曰シ民ヲ化シ
テ此陽鳩ヲ天ヨリ賜リタレ柱ト思名此ノ本ヲ忘シテ
シキトノ御志ノ柱可成前ノ文ニハ神名ヲアラハシ此

三陽神陰神ト書タリカヤウノ所ニ心ヲ付ガレバ神
代卷ハ雍^{イフ}濟^{イフ}陽^{イフ}鳴^{イフ}ヲ獲^{イフ}吾^{イフ}ヲ迄^{イフ}ハ御^{イフ}志^{イフ}ノ立^{イフ}テヤウ内ニ
有^{イフ}テ外ニアラハレズ外ニ不^{イフ}顯^{イフ}間^{イフ}ハ其^{イフ}實^{イフ}難^{イフ}斗^{イフ}諾^{イフ}冊^{イフ}尊^{イフ}
そ人ナレハ也^{イフ}乙^{イフ}陽^{イフ}鳴^{イフ}ヲ獲^{イフ}吾^{イフ}ヒテ民^{イフ}是^{イフ}ニ化^{イフ}スルヲ以^{イフ}テ是^{イフ}ヲ
導^{イフ}吾^{イフ}フ^{イフ}一^{イフ}シカト諾^{イフ}尊^{イフ}ハ天^{イフ}ノ陽^{イフ}德^{イフ}ノ如^{イフ}ク冊^{イフ}ノ尊^{イフ}ハ地^{イフ}
陰^{イフ}德^{イフ}ノ如^{イフ}ク其^{イフ}化^{イフ}面^{イフ}ニアラハレタレニ依^{イフ}テ是^{イフ}ヨリ人^{イフ}体^{イフ}ノ
德^{イフ}ヲ天^{イフ}地^{イフ}陰^{イフ}陽^{イフ}ノ德^{イフ}ニ准^{イフ}ヘテ說^{イフ}也^{イフ}故^{イフ}諾^{イフ}尊^{イフ}ノ問^{イフ}ヲ陽^{イフ}神^{イフ}
問^{イフ}ト書^{イフ}タリ^{イフ} ○汝^{イフ}身^{イフ}有^{イフ}何^{イフ}成^{イフ}耶^{イフ} 允^{イフ}テ國^{イフ}ヲ治^{イフ}レハ夫^{イフ}
婦^{イフ}德^{イフ}ヲ不^{イフ}合^{イフ}難^{イフ}治^{イフ}北^{イフ}難^{イフ}ノ朝^{イフ}スレハ家^{イフ}ノ亡^{イフ}レ相^{イフ}ト云^{イフ}リ

如其男ハ表^{イフ}ヲフトメ女^{イフ}ハ是^{イフ}ニ從^{イフ}ヒテ内^{イフ}ヲ務^{イフ}ム男^{イフ}ノ勤^{イフ}ル表^{イフ}ノ一^{イフ}
詞^{イフ}ヲ不^{イフ}加^{イフ}女^{イフ}ノ德^{イフ}トス若^{イフ}女^{イフ}表^{イフ}ノ一^{イフ}詞^{イフ}ヲ加^{イフ}フレハ政^{イフ}ハ成^{イフ}就^{イフ}
シガタシ故^{イフ}有^{イフ}何^{イフ}成^{イフ}耶^{イフ}ト問^{イフ}吾^{イフ}フ也^{イフ} ○對^{イフ}曰^{イフ}吾^{イフ}身^{イフ}具^{イフ}成^{イフ}而^{イフ}
有^{イフ}稱^{イフ}陰^{イフ}元^{イフ}者^{イフ}一^{イフ}處^{イフ}陽^{イフ}神^{イフ}曰^{イフ}吾^{イフ}身^{イフ}亦^{イフ}具^{イフ}成^{イフ}而^{イフ}有^{イフ}稱^{イフ}陽^{イフ}
元^{イフ}者^{イフ}一^{イフ}處^{イフ}思^{イフ}欲^{イフ}以^{イフ}吾^{イフ}身^{イフ}陽^{イフ}元^{イフ}合^{イフ}汝^{イフ}身^{イフ}之^{イフ}陰^{イフ}元^{イフ}云^{イフ}爾^{イフ}
具^{イフ}成^{イフ}ノ二^{イフ}字^{イフ}ハトモニ志^{イフ}ヲ合^{イフ}セ國^{イフ}ヲ可^{イフ}治^{イフ}ト云^{イフ}志^{イフ}具^{イフ}ニ成^{イフ}就^{イフ}
レテ陰^{イフ}元^{イフ}ト云^{イフ}物^{イフ}一^{イフ}処^{イフ}アリトノ義^{イフ}也^{イフ}俱^{イフ}ニ志^{イフ}ヲ合^{イフ}ストハ
云^{イフ}ハ陰^{イフ}元^{イフ}内^{イフ}ヲ治^{イフ}ルノ義^{イフ}表^{イフ}ノ一^{イフ}心^{イフ}ヲ用^{イフ}ヒマレキト云^{イフ}一^{イフ}処^{イフ}
夕^{イフ}レカニ思^{イフ}ヒ定^{イフ}メタリトノ對^{イフ}也^{イフ}其^{イフ}故^{イフ}陽^{イフ}神^{イフ}モ吾^{イフ}ニハ表^{イフ}ヲ

勤テ陸元ニ負マレキト云一処ヲ思ヒ定メタリ吾身ノ
一處 ヒトフノコトハリト訓スベシ無有是處ノ文ヲコノコトハリアルヲナシト訓スルガ如シ
吾身ノ陽徳ノ根元ト汝カ身ノ陰徳ノ根元トヲ合契
然レ此今ハ者ノ字アルハ一處ト音テ可流歎者ノ字指物ト指法トアル中
シテ天下ヲ治ストノ義ナリ諸抄ニ陰元陽元ヲ乾坤
今ハ法ヲ指シ

ノ元ト云我也ト説タレハ文十ガク書テモ其釈シテ難シ

云余ノ二字ハ此後ノ一ハ紀ノ文ト易ル事ナキ故ユヅリ
タレ詞也 ○即將巡天柱 天柱ト云ハ柱有テ巡ニ非ズ

僅ナレ陽鳥ヲ獲テ御心ノ存ニシテ何程大國ヲ得タリ此
此ノ本ヲ忘レシキトノ御志ヲ巡リテ國ヲ生クトノ思石
也 ○約束日 子ギリテト訓スル字也テ二ノ切レ子故互 子ギリテト訓スル字也テ二ノ切レ子故互

ニキヲ握リテ約束スル義ナリ和語ノ切レヲ用ヒテニ音ヲ
物ヲヒキキギルハナキニキル可成
一音ニツメレ初メ也 ○妹自左巡吾當右巡 妹トハ
カレ 上古礼意

シ兄弟夫婦トナレ礼ヲ定メラレ後ハ論ナレ礼ヲ定メカレ
以テハ伏羲聖人ナレ其妹女嫫ヲ妻トシ舜ハ聖人ナレ其
娥嫫女英姉妹ヲ並テ妻トス周公且礼ヲ製シテ後ハ吳
不要同姓トタメ云ヘリ妹ヲイロト、訓ヌ色弟ノ義ナリ
左へ巡シ右へ巡ス一相別レテ巡ルナリ日本紀雄略ノ卷ニ
吾妹ヲワキモト訓シ其下ニ妹妻為妹蓋古之俗ナ
トアリ兄弟夫婦ナリシ古凡ヨリ後ノ世ニ至リテハ妹ナ

ラ子化書ヲイモト哥ニモヨムナリ ○ 既而分巡相遇

垂加流ノ書ニ夫婦別有リト云ハ聖人ノ教也故ニカレ巡

ルト分ノ字ヲ書タリト云ニ兄弟夫婦ト成ル時代何ヲ

夫婦別アリノ道理アラヤ ○ 陰神乃先唱曰妍哉

可憂少男欽陽神後和之曰妍哉可憂少女欽遂

為夫婦 陰神ヨリ詞ヲカケテ云フ了紀見ヘタル通り也

妍哉ノ一モ紀見ヘタリ文字ハ更レハ同ジ但シ紀

ハ陰神ノ先キヘ物云フヲ不宜トテ此所ニテ直ニ巡リ

改メテトアリ然ルニ此一書ハ廿八ナクテ直ニ陽神御

對アリ夫婦ト成ラセテ云フ体ニ書タリ是ガ神代卷ノ

實事ノ所ニテ紀ハ皇統ヲ立テ書キ一書ハ實系ヲ專

要ニ書クノ差別也 ○ 先生蛭兒使載葦船而流之

コノ先ト云字ガ字服也蛭兒ハ嫡子也ト云ニ為ノ文字

ナリ蛭兒ハ弟一ノ御子ニテ直ニ日徳ヲ受テツギ王者ト

可成御身ナリ故ニ日兒ト書テヒルコト可訓ヲ御妹

天照大神ヲ位ニ即テ奉リテ云フ故日徳ニツハ並べ雅ク

日ヲヒルト訓スル同音ノ文字ヲカリテ此蛭ノ字ヲ用

ヒ蛭兒ト書タリ御徳天子トスベキニハ不當故ニ則チ

コノ豊葦原ノ國ノ傳代官トシテ流政ヲトラシメテ
允ツ國々ニハ土地ノ凡ト云セノ有リ是ヲ流俗ト云是
ヲ急ニ變ゼントシテハ民背テ難治ソレナリニ政ヲ執テ
次第ニ改ムルヤウニスルヲ流政ト云流俗ニ從テ政ヲ執
ルノ義也此ノ蛭兒命武德薄ク弱ク御座ス故民ヲ
治ルニハ甚タ宜シ葦原ト云ハ豊葦原ヲ何方迄モコギ
行テ治ルノ義又土地ヲ舩ニタトヘクン^ク一モアリ紀ノ本文
天磐椽樟舩ノ改ニ委ク見ヘタリ七書ノ吳子ニモ順俗而
教ト紀ノ本文ニモヒルコノ一ヲ順風ト書タリ國ヲ治ルノ



戈備リ玉ヘ任天下ノ主ト可成ノ徳ハ不備是レ陰神先
物ヲ仰セラレシ故天地ノ道理ニ違ヒ天下ノ主クンベキノ子
ヲ生ミテ^ク一ヲ得玉ハク柔ナシ徳ノ子ヲ生テ^ク一陰ノ勝クンガ
故ナリ然レバ蛭兒命ハ猶子ニシテ天照大神ハ後ニ生シテ
然レ任紀ノ本文ハ皇統ヲ重コズん故天照大神ノ才一ノ
御子ヲ^ク一書クン也巫祝ノ蛭兒傳ト云物ヲ立タリ
紀ニハ三男トシ来ルニ此一書ニハ弟一トスん故紀ト不合
ヲ難義ガリ縦横ノ道理ヲ不合点ニ依テ傳ヲ極
ク^ク一也其傳一流ニハ葦原ノ舩ニ載テ流スト云ハイマ

ダ人体不備御流産ナレ故ソシテ書ク文ニテ
立体不具成ルニ依テ蜂ニタトヘ葦ノ葉ニ包テ捨テ
羨也ト云々又一流ニハ御徳不備ト云ハ凡ヒト云出ハ
屈伸ヲ自由ニスル物ニハ蜂ニ喩ヘ異國ヘ流シヤリテ
ト云々何モ證拠ナキ説ニテ此ガ為ニ卷物ヲ極ヘ意
益ノ長文ヲソヘテ秘傳ノ一トス一向不足信予モ少
リシ時ハ伊執ノ喜早因幡ニ傳リ受テ正親所家
ノ傳ヲモ受タリ今思ハハ抱腹ノ一ト成ヌ
○次生淡洲 ウムアノニミツ 思フニ今ノ阿波國可成欽紀ニハ陽

嶋ノ次ハ淡路也今此一書ハ淡路ハ豊秋津洲ヨリ次ニ
アリ上古ノ一傳説ノミシテ唯一支トハ云ハ凡是レハ純ノ
方可然 ○此亦不以充兒數 コレモ生ミクニ程ニハ不
思名トノ心ナリ ○故還復上詣於天具奏其狀 ヤレハカテテニキリウテ、アミツツサニマソソアリセミツ 此ノ
天ハ本心ナリ初メ本心ニ日徳ノ如キ志ヲ立ト思名定メ
ラレ陽嶋ヲ得玉ヒシニ如是大徳ノ御子モ不生大凡
國モ生玉ハス日徳ニ背クニヤト私情ヲ以テ本心ニ同
義ヲ文章ニカケテ書クニモ也 ○時天神以太占
而ト合之 ワラナク 本心ヲ以テ太占ニカケテ是ヲトヒ取テ其レ太占

ト云太ハ尊ム詞占ハ天理ニマカスルノ義古事記ニ隨ノ字
ヲマニクト諾ヤ允テ古書ニマカスルト云クハマニクト諾
来リ菅天神ノ此タビハヌサモトリアヌタムケマモ
ミチノニシキ神ノマニクトアリモ神慮マカセニ御覽
下カレベシト云義也トカク物ニマカスルコト云ハ梵
語ニモマニ珠アリ則チマニハ如意ノ義ニテ如意宝珠ト
釈ス然レバ梵語ニカリタムヤウナレ是ハ自然ト叶ヒ
タレト見ヘ天理ニマカセテト^{ウラヒ}エフ也允テトト云ハ己ヨ責
テ是レハ理合フヤ不合ヤヲ吟味タムコト云フ况ヤ神代ノ

事ナレハイヨク以テ其義可成有術非成ニ神代ノ
有術非成トハ此ノ糸ノ末ノ神代ノ太占モ定テ疑ヲ変スルノワサハ有カ
昔ハ死タレ鹿ノカマホ子ヲ按テヨクカハキタレヲ合歡
タレ可成ト云相違也又マニヲ訓釈ニモ下ノ糸ハ不合款
木ノ木ノ皮ヲ以テ是ヲヤキ其ヤケヤウニ依テト^{ウラ}成ニ
タレト也カグ山ノハミカミモトニウラトケテカクヌク
シカハツマコヒナセソ大江ニ匡房卿ノ哥ニテハカト
云ハ別チ子ブノ木也和集抄ニ櫻桃一名朱櫻和名波
波加トアリニハサクラ氏云義也和名抄ニ依テ波々加
ハニハサクラト号フハ非ナリ合歡木ト云ハ甚タ秘説
ナリ吉田家龜ノ甲ヲマクニモ迎来迄ニハサクラヲ用

ヒラレタシレ今ハ合歡木ヲ用ヒラレテ甚ダ秘セラレ
由也古來禁中御トノ料波々加ノ木ノ皮大和國有
封ノ社へ仰セテ献スル由延喜式才三見タリ大和
國忍海郡^{ウスヒ}笛吹山ニ此木アリ^{ウスヒ}笛吹ノ神社祝等コノ
木ノ皮ヲ剥テ禁中ニ献スル由古書ニ多ク見ヘタリ然
レハ是則有封ノ社可成神代鹿ノカタボ子ヲ焼テト
ノ後世ノ巫祝等ヲシテ是ヲ見ゼシメバ穢也ト可云若
コレヲ穢也ト云フ神代ノ神ハ皆穢タラシヤ一矣スベシ
其後飛ノ甲ヲ焼テト事初ル飛トハ和漢注ニ是

有り吉田家ノ秘書ニ飛飛傳ト云物有りニ、ギノ尊降
臨ノ時ヨリ始ルト云今案ニ飛飛傳ハ其文体史記
ノ飛策傳ヲ似セテ極ヘタリ^トニテ彼ノ飛飛傳ニ神
飛^ト太占命ト号スル由アリ^ト史記ニ王靈夫子ト云フ事
アリテ宗隱ニ尊神飛而為之作号ニ然レハ太占命
ト是ヲ似セタリ^ト見ヘタリト部ノ一委クハ別ニ書
アリ写テ可知是ヲ雖スル^ト甚タ長クシテ此ニ載ガタ
スベテ日本ニハ上代ノ占ヒ十二占アリ是ヲ雜占ト云日本紀
ニ載タリ^{カレハナカレ}拍流ノ占神武天皇ノ糖^{タカ}ノ占ヲ初メ言ノ音占

と等何しそ神代ノ古凡十九故其微明ラカ也河内國平岡
ノ社ニ傳ハル正月ノ管彌ノ占ハ今ニ傳ハリテ是ヲ行ヒ
其奈ノ占ハ一時ノ業ニシテ今日ニ不傳モノ多シ言ノ音ノ
太占ハ甚ク秘シテ今ニ傳フ俗ニ五音ノ占ト云ス又十
二符ノ占ヒト云ス是レ也不細有テ予是ヲ傳フ神代ノ
太占モ定テ疑ヲ交スルノ業ハ有クニ可成 ○乃教曰婦
人之辭其已先揚乎宜更還去乃卜定時日而降之
本心ヲ以テ私情ニ教ルノ義トクト本心へ解リテ云夫レテ見
ハ陰ハ先キ立ワレシキト云御約束有クニ先達テ物ヲ云フ

改知是ナラント思召是ヨリ猶日徳ニカセテ治ント思召ニ能
ク心ヲ修メ云フヲ後世ノ体ヲ借リテ卜定時日而降之ト書
タリ ○故二神改復巡柱陽神自在陰神自右既
遇之時陽神先唱日妍哉可愛少女歎陰神後和
之日妍哉可愛少男歎 紀ノ文ト曰し ○然後同宮
共住而生兒號大日本豊秋津洲 此時イマダ宮室ノ
製不可有後世ヲ以テ書クモノ可成紀ニハ澄路洲ヲ以テ胞
トシテ大日本豊秋津洲ヲ生トアリ此ニハ其意ナクシテ直ニ
大日本豊秋津洲トアリ是レ紀ト書トノ別也紀ノ新ニモ云ヘン

如ク今云所ノ豊前豊後ヲ生ヌク也上古ハ一國ニシテ豊前後
但豊國トシテ之ヲ後世大日本トヒヨリノ神武ヨリ大和ニ群
ナカレシニ依テ日本書紀出来ノ時迄モ大和ヲ都トスル故大
和ノ一名秋津嶋ナリノ雄略卷ノ御所ニ見ヘタリ大日本
トヒヨリ秋津洲ヲ都ト可被成基ノ豊ノ國ヲ生ヌク
ト是ノ國從ヒタニ我也然レハ豊ノ字一字ガ眼ニシテ上下ハ村
タニ文字ナリ通用ノ説ニハ今テノ五畿内東海道東山道ニ
紀伊國ヲソヘテ凡ヘテ四十五ヶ國ヲ一所ニ云クハ詞トアリ
吉備子洲迄一ツ書ニシクハ何ゾ四十五ヶ國ヲ一ツニ云ハ

是レ天照大神ノ都ヲ大和ト心得タニ説ヨリ起リクハ説
ナリ○次淡路洲アハダノシマ如文○次伊豫二名洲イノフタナノシマ紀ニ
秋ノ通リ也此次予ニ紀ト書トノカハリ有レハソレハ一説
クナレバ何レヲ是トモ難計唯文ノマニ可説

○次筑紫洲ツクシノシマ是モ紀ニ委ク秋ノ○次億岐三子洲オキノミフコノシマ
次佐渡洲サダノシマ紀ニハ億岐洲ト佐渡洲ヲ二子ニ生トアリ
フタゴノリノ紀ニ秋ノ終ニ此ニテハ次予シテ別ニ生クハ体
ニ書タリ○次越洲コシノシマ越前越中越後能登加賀本ノ
一國ナリし時ノ乎ト説来レハ是ハ出雲伯耆ノ邊ノ一

ニテ八岐ノ大蛇ノ一ヲ古事記ニ古志八岐大蛇ト書タリ

出雲ノ一也 ○次吉備子洲 紀ト曰ジ ○由此謂

之大八洲國矣 是七紀ト曰ジ ○瑞此云弥圖妍

哉此云阿那而惠夜可愛此云哀太占此云布刀磨

爾 以上音注ナリ ○一書曰伊弉諾尊伊弉册尊二

神立干天霧之中曰吾欲得國乃以天瓊矛指垂

而探之得礮取盧嶋則拔矛 天霧ハオボロケニ

シテ物ノ初メナレ故万事定カテ中ニ志ヲ立テ

ト云ヌナリ以下前段ト曰ジ ○而喜之曰善乎國之

在矣 國ノ在ト云ハ化ヲ可施國ノ在ト云ヌ也此一書

ノ文ヲ以テ鋒ノシタリノ疑テ初メテ嶋トナリタレハ非ズ

本ヨリ國ノ自在ニタレテ在ノ方ニテ可得心 ○一書曰

伊弉諾伊弉册二神坐干高天原曰當有國耶乃以天

瓊矛畫成礮取盧嶋 諾尊册尊ノ陽嶋已前ノ御住

所分明ニ不傳故ニ高天原ト知レタ所ヲ書タレモノ也陽

嶋ヲ畫成トハ一ツヒトシテリヲ極テ治メテ也

○一書曰伊弉諾伊弉册二神相謂曰有物若淳膏其

中蓋有國乎乃以天瓊矛探成一嶋名曰礮取盧嶋

コレハ亦御夫婦御相説被成有物トハ導クラバ王化ニ
服スベキ人物也タトヘバ淳膏ノ如ク火徳ヲ以テ煮ツメ
タラバカタマレベキ所アリ如其日徳ニ准シ天ノ又ボコヲ
向シトテ導玉ハ一ツノシマリト成ル陽徳ニテシマリク改
オノコロジマト名ルトノ也 ○一書曰陰神先唱曰美哉
善少男時以陰神先言故為不祥更復改巡則陽神
先唱曰美哉善少女アチニヤ一書十ノ段ハ甚ダムワカレキ一書十ノ
陰神陽神ノ詞ノ前後ノ論ハ紀ノ通りナリ

○遂將合交而不知其術時有鶴鷓飛來搖其首ツイニミアセントヌルニレカモ

尾ニ神見而學之即得交道コシハ 不知其術ト云ヨリ此
一書ノ秘事ニシテ一朝一夕ノ論ニ非ズ大ニ心ヲ用ヒテ可見
一ツ本文ノ通りニテ一通リニ説バ夫婦和合ナサレトスレモ
其和合ノ被成カクヲ御存知ナク不知其術ト書テ然レモ
其時ニ當テ有鶴鷓其鳥首尾ヲ搖術ヲ御覽被成ニ神
是ヲ見テ合交ノ術ハ如是スレバナレモト鶴鷓ノ形ヲ學ニテ
交道ヲ覺ヘ玉クト云也日本ノ政ヲ始ル大祖ノ諾尊也何ソ
鶴鷓ノ尾ヲ搖ヲ見テ始テ交道ヲ倣玉ハシヤ本文ノ通ニヨバ
鳥ニ劣リタレト云ベシ故ニ一流ノ神道者説ヲナシテイハク

夫婦和合ノ術ハ鳥スラ人ニ不倣知レ然レハ天地自然ノ道
理ニテ備ヘクモソノ也ソシテ私ニ妬^{ウラ}怨^{ウラ}ニ醜^{ウラ}恣^{ウラ}ニ此ノヲナセバ
家ヲモ亡シ國ヲ失フニ至ル鳥ニ字ニテ交通ヲ成スニ非ズ
鳥ダモ自然ト知レルヲナレバ人ハ此レト別ニシテ道ヲ立和合
スベキ也ト云フニテ得^レ交通ノ三字ヲ書タリト云々今ノ神代
卷古書ト違ヒ大ニ落字有ル所也テ所是レ其一ツ也合文セシト
シテ然レハ不知其術陽神ハ天ノ道ニ從ヒ陰神ハ地ノ道ニ從テ
夫婦ノ道ヲナス鶴鴿有テ飛來テ其首尾ヲ搖クカ如シト
云心ノ文脱シタリノスヘテ鶴鴿ト云鳥夫婦相向テ交度カ礼ヲ

ナスガ如ク首ヲタシ尾ヲサゲ良久シテ合文ノ術ヲナス鳥
スラ其礼有ルガ如シト恩名テ鶴鴿ニ不醜夫婦ノ道ヲ立
ルヲ得テ得^レ交通ト書タリ然レハ俗点ニ其術ト有
ル術ノ字ニ十ト詭ハ非也音ニテ可詭交通ヲ得ル所ニ至
テ道ヲ得テ也書經ニ鶴鴿在原兄弟急難每有良朋
况也永嘆注禽經云鶴鴿友悌張華注曰鶴鴿共母者
飛鳴不相離故取以喻兄弟又鶴鴿在原宜于兄弟
トモ有リ兄弟中ヨクタハムルモ也我が友トスル眷令
ノ母ヲモ大事ニシテ道十トヲ送テ不相離故ニ兄弟

ノ中能キ一ニタトウノ諾尊冊尊ハ併兄妹也脊令ノ中
善キニタトヘ詩經ノ弟一ニ関々睢鳩トテ睢鳩ト云鳥和訓
ミサゴニテ夫婦中善クシテ而モ不妊乱交ハ時ハ翼ヲ十
ラベ相令シテハ所ヲ異ニス故ニ周ノ文王夫婦ノ中善クシテ
不妊ヲ褒タレ詩也烈女傳ニモ睢鳩ノ鳥人未嘗見其
交トアリ鳥ヲ以テ夫婦ノ徳ニタトヘタリ一文王ニ初リタ
レ此睢鳩ヲ脊令ニカヘテ書タレハ御兄弟ヲ以テ也此説
甚タ可秘 ○一書曰二神合爲夫婦先以淡路洲次
洲爲胞生大日本豊秋津洲次伊豫洲次筑紫洲

次雙生億岐洲與佐度洲次越洲次大洲次子洲
是モ國ヲ生モリ次第ノ前後アル分也叔紀ノ本文ニハ淡路
洲ヲ胞トスト有レ此ニハ淡路洲ヲ胞トストアル也
子洲トナリ有レハ吉備子洲也 ○一書曰先生淡路洲次
大日本豊秋津洲次伊豫二名洲次億岐洲次佐度洲
次筑紫洲次壹岐洲次對馬洲 是レモ國ノ生ニヤウ
ノ次第違ヒ紀トハ洲ノ數不足ソレガ一説ト見ヘタリ
○一書曰以碓取廬嶋爲胞生淡路洲次大日本豊秋津
洲次伊豫二名洲次筑紫洲次吉備子洲次雙生

億岐洲與^ト佐度洲次越洲 是^ト又一向陽嶋ヲ胞ト
スト有リテ淡路洲ハ生トアリ上古口傳ノ達目迄也洲々
ニモ前後アリ今難考 ○一書日以淡路洲爲胞生大
日本豐秋津洲次淡洲次伊豫二名洲次億岐三子洲
次佐度洲次筑紫洲次吉備子洲次大洲 淡路ヲ
爲胞ハ紀ノ通リ也大洲トアルハ肥前肥後兩國ノ惣名也
肥前肥後ハ景行天皇ヨリシラヌヒノワクシト云名起リ大
國ト名テ後肥前肥後二國ニ分リ古事記ニ武^{タケ}御名^{ミナ}方命^{カタ}
信濃國諏訪ニ云テトアルハ今ノ肥前ノ地也又神皇皇后

ノ三韓へ渡ラセ玉ク時石ヲ取テ腰ニハサシ御降朝有^ル迄
胎中ノ御子産シ玉クベカラズト仰ラレシ石ハ玉嶋ニテ取
セ玉ク此玉嶋今ノ長崎ノ地ナリ其石ヲ神体トシテ紀
昴粟嶋神社ニ祀^ヒ肥後ノ玉嶋ニハ非ズ備前備後ハ
肥前肥後ニ紛^ル故濁リテヨム也備ノ字モ清音ノ字
ニテ漢音^ハ濁音ノ例ナシ全備ナド云時ハ濁ルモ理リ
ナリ書物ノ題号ニ備考ナド、濁ルハ備前備後ニヲフ
ハレク^ル讀ヤリ也 ○一書日陰神^ニ先唱^シ曰^ク妍哉^ニ可愛^ク少男^ト
平便^ニ握陽神^ノ之手^ヲ遂^ニ爲^ス夫婦^ト生^ル淡路洲^ニ次^ニ蛭兒^ト

是レハ此段ノ一書ノ中第一ノ一書トイフ曰シ陰神ノ方ヨリ陽
神ノ手ヲトルト云ガ相違也トカク陰ノタカブル体ヲ書タ
リ第一ノ一書ハ蛭兒ヲ先ヘ書テ淡路ヲ後ニ書タリ此ハ
淡路ヲ先ニ書蛭兒ヲ後ニ書タリ蛭兒ノ下ニ古本任
之トアリ然レバ蛭兒ハ御徳不勝ニ依テ淡路一國ノ主
トナサレ天照大神ノ御代官トシテ後ニハ國々ヲ巡リ治メ
テト見テあり其ノハ紀ノ新ニ委シテレバ此ニ異スト也
○一書曰伊弉諾尊曰吾欲生御宙之珍子乃以左手持
白銅鏡則有化出之神是謂大日靈尊
是ノ一書ハ帝

王五運歷年記ヲ以テ書タレヤウニ見ヘタリ日本ノ古説トハ唯
曼歷年記ハ支物紀原ナドニモ引タレ書ニテ盤古死後左
目為日右目為月是ト能ク相似リ文章ヲ是ニカリテ日
本別ノ一説ヲ書回シタレモノト見ヘタリ諾尊トイリアリテ
冊尊ヲ不書然レハ御子達ノ御出生ハ是ヨリ前ノ一也
冊尊崩御ノ後諾尊汁リ御存生ニテ御母意リ御子ヲ
育テ其育ヤウノ品ニヨリ御子達ノ徳モソシクニ分シタ
レヤウニ見ヘタリ吾トハ諾尊自ラノテウノ詞御宙之珍子ハ
天地宇宙ヲ可統御珍子ヲトノ為也珍ヲウヅト訓スルハ

ウツクシキノ美美德ノ謂也後世迄モ自然ト位アル人ヲウ
ブダカキト云詞ノ本也紀ノ本文ニモ教スル如ク能子ヲ生
トテ思案シテ生ルモノニ非ズ堯ノ子ニ丹朱アリ堯聖人
ナレバ其子ハ徳不勝孔子モ父ハ不徳ノ人也徳ハ其ノ人ニ
依テ備ルモノニテ父母能キ子ヲ生ント思ヒテモ自由ト可生
道理ナレバニ諾尊ノ御子ニモ素尊ト云要人アリ諾尊
是ヲイカシレシ五ヒ難シ紀ノ本文ニモソシ故点ヲ甘カヘテ
ヲト云ヲニノカナニカヘタレキアリ考ヘ合スベシ此所モ御宙
之珍子ニ生ト欲スト訓ムニ珍子ヲ生トハ訓ムヘカラス御子數

多アル内ニテ能タメシクラハ五ヒ育アゲテ弟一ニ勝シタラヒト思
召ヲ天子ニ備リテクヘキヤリニ育アゲ玉ヒ是ニ次デ徳光ア
ルヲ補佐ノ臣ニ育アゲ玉ヒ是ニテ宜シト思召ス御油割ヨリ
愛ニ遇キ玉ヒ育テテ御子我カ俸ニシテ天子ニ成ガタク
是ヲ素尊ト謚ス左ノ手ハ陽ニシテ而モ人平日ノ用スル
ツカハズ右ノ手ハ朝夕万用ニツカヒテタトハ左ハ君ノ如シテ
右ハ臣ノ如ク其不御シテ陽ニ立ツト右ノ手ハ御テ陰ニ
立ツト以テ可知四方ヲ分ル時ハ東ヲ頭ニシテ西ニ向フ東ハ日ノ
カシラト云義也南ハ日ノ能ク巡リテニナニユルノ義西ハ

日ノイニシト云我北ハ向日巡ラズシテ陰気斗リナレバキタ
ナキノ我右ノ通り位ヲトル時左ノキハ南へ指能ク日ノ名
ト云我ニテヒダリト云ヒ右ノキハ北へ指日ヲニキルト云我ニテ
ミギト云フ然レ左ハ陽故三音也右ハ陰故二音也左ノキ
ヲ以テ鏡ヲ取ルト云ハ我カ子ナガラモ天下ノ主ト可成徳
アル故上座置テ幾ル御子達ニモ敬也叔朝夕ノ御育鏡
ヲトグカ如ク一日モ其徳ヲ鏡ニカケズト云フナキヤウニ育
アゲ我ヲサレバ其御育ノ徳化ヨリ御心モ自然ト上ニ立
テ天下ノ鏡ト可成ヤウニトギ出シタレ神靈ヲ胸中ニ照シ

五ク御子ト成リ五ク故是ヲ天子ノ始メトシ大日靈尊^{イナリ}ヲ
ス大日靈ハ大陽日徳ノ光ノ如ク明ナル鏡ト成リテ万民ヲ
是ニウツシ賞罰ヲ執行ヒ五ク御名也然レニ其鏡白銅鏡
ト書キテトスミノ鏡ト訓ス然レニ音ニテ読テモ不苦是
非トモトスミノ鏡ト可訓フナラバ音注可有銅ハアカキテ
成レ何トテ白ノ字ヲソヘヌレハ五行ヲ配當スル時酉ハ金^{カネ}ニ當
リ色ニ取テハ白シ金ニモ五色アレレ白キヲ以テ金ノ色ト云
来ルソレハ土ニモ木ニモ色ノカハリクニ有レ青キヲ木トシ黄
ナレトトスルガ常色也金ノ本体ヲ不失鏡ト云我垂加ノ流

及十トテ白銅鏡ヲ後世ニシロメノ鏡トテ極上ノ銅ノ鏡ト
ト云ハ説ハ罕數也(右化出之神トアレハ御心ガ鏡ノ如クト
ギ出シタレハ神靈トナラセヌト云ヌニテアラタニ此時生シヌ
ニ非ズ) ○右手持白銅鏡則有化出之神是謂月弓尊
コレハ又御子ノ内ニテ天照大神ニ續テ臣下ノ第一トモナリ君
ヲ補佐スル徳備リタラシ見立テ是モ御心ヲ鏡ノ如クトギ
立テ育玉(左ノ手ニテ育ム如ク何事モ自ハ執ラズト云ヌ
ニテナク左ノ手ノ為ニ仕ハルガ如シ天照大神ニ仕ヘヌベキヲ
ニ育ムク是ノ父ノ徳化ニ依テ補佐スベキノ神靈ヲ備ヘ御成

長アリ果シテ天下ノ政務ヲ補佐ナカレテ天照大神ニ次テハ人ニ
尊ミラレヌクタトヘバ天照大神ハ日ノ如クナレハ日ノ神ニ云ヒ其
日ノ晝キ時ハ月是ニカハリテ光リナス故是ヲ月弓尊ト謚ス
月ハ常ニ滿ル物ニ非ズ日ノ光リヲ借りテ少シ宛光リヲナシ終
ニ十音ニ滿ル月ト成リ十六夜ヨリ少宛欠初メ行ク臣下ノ
光リハ皆君ノ光リヲカルト云ヌヲ知スベキヲ半月ニ名トテ
月弓ト云ハ今云フ弓張月ト云フ也月ハ滿月ニテモ光リノ
字彙曰説文月闕也徐曰陰不可抗陽臣不可敵君故於文闕者為月以其闕之時多也
ツキル時アル故ツキト云月莫厥反説文闕也大陰之象陰
允テ三十日滿ハ唯十九日ノ前後ハ九日皆闕故云多也
不可抗陽故於文闕者為月月生十日之所照ト云

ソレ故説又ノ文字ニハ勿トス半月ノ中ニ世界ノ影ノ移リタル
字也ソレ故是ノ古字ノ体ノ心ヲカリテ月ヲトスルカ是ノ有
元服ノ故實有り紀ニ委シテレバ畧ス ○又廻首^{ケラミクシラ} 右ニテ右
ノ手ニテ鏡ヲ取テ日神ヲ生じ右ノ手ニテ鏡ヲ取テ月神ヲ生
スルト云段歷年記ニ左目右目日月ト成ルト云似タリ又左
ノ手ヲ以テ日ヲサヘ右ノ手ヲ以テ月ヲサヘ云ト云帝尺天
ノ佛家ノ説モ不遠是等ハ文章ニテ其意味似サル也右ニ云
如ク此一書ノ心ハ鏡ヲトギ出スガ如ク御子ヲ育マツト云々
トハ詞ナリ日ノ神月ノ神ノまハ化出ト二字ヤレ此ニ至テ

素尊ノ御まハ出ノ字無ク化ノ字一字ニテワカヒタリ是等ガ神
代卷横ノ段ノ服目ニテ容易ニハ可見トニ非ズ先達テ皆コノ
出ノ字無キノ論ヲナサズ同ジヤウノ説ツルハ書ヲ見ルま
ノ不委ガ故ナリ化出トイハバ俗ニ云フトギ出スト云心ナリ
儒門ニテ明德ト云ヒ佛家ニテ真如ト云フ内ニ備ヘタル所ハ
明ナレ凡人慾ニヲホハシテ曇レルヲ磨クテバ元ヨリソコニ
光リヲ出スト云ガ如ク下ニ金銀ノ蔀綺ヲシテ其中ヲヌリ
クロメテ置可寧ニミガテバ下地ニアルマキ旦アラハシ出ヅ是
ヲ俗ニ云フトギ出シマキ旦ト云フ日神月神ハ鏡ニカケテ

トキ出し吾ヲ二御徳モ勝レタレ素尊ニハ御愛念力
子テ御油新アル所ヲ廻首ト書タリ向フ一節ニ不見コノ
御子ノ為ニハ愛ニヲボシテ廻首ト云フ世上ニテ之ヲ神道者
ノ説ノゴトク神代ノ神ト云ハ存生ノ時モ神ニシテ不思議
アルモノナラバ素尊ハ生レテウベカラス又悪夢ヲモ作テウベカ
ズ諾尊丹尊モ天照大神モ今日ノ人ニ同シ人ナレ故人情
ニ於テハカレナシ其私情ヲ防テ道ノ如クニ行カ私情ニハ
ホシテ道ノ如クニ不行カノ達也 ○顧眄之間 顧ハ
カヘリミント訓シ念比ニ思フテ人ヲ見ル也ソレ故顧問ト云フ

時ハ我ヨリ上ナレ人ガ念比ニ思名ヲ尋来リテ云フト云リニ成也眄ハ
此段大ニ不審也眄ヲサガリト可訓説文目偏合也又邪視也正邪ハ音斜不正也
蓋余念人ヲ見ル目ニテ愛服也氏注ス余リイトヲシク思名ノ人育
トトメト通スサカリハ邪ノ義也メサガリ目ヲホソクシテミル下卷一夜之間ヲト
ノトト云云之間ヲカリト訓シタレハ下卷本文ニモ一夜之間ト
ヨノカラニト訓シタレハ誤リ可成彼レハ音注モナシ若シ和訓セバ之間ヲノアヒタニト
書テ一夜ノカラニト誤セタリリトヲト通フ故轉シテ通ズ可
成氏ノミト成氏可訓此段ノ音注ヲ見損ヒテ下卷ノ之間ヲノカラト訓タレ可成
成フクカラニト秋ノ草木ノトヨミクモフク間ニ秋ノ草木ノトホ
又フクカラニトハカラハ故ノ字ト云フクニト云
ル心ナリ ○則有化神是謂素戔鳴尊 化ノ字

悪人ノ為ニ化セラレバ悪ト成リ善人ノ為ニ化セラレバ善人
トナレ故ニ能化還化ノ四字有テ洩函類鑑卷四百ニモ此文ナシ
飯還却カフテト訓スレ氏皆意別也
間々ツカヒタリ還化ト云ハ却テアシク化スル義昨日マテク

西人モ善人ニ化セラレテ今日ヨリ善人ト成ルノ類ヲ能化トシ
字彙云又教化以道業誨又謂之教新行於上風動於下謂之化ト云アリ
日本ノ訓ニテハバカス氏ハケル氏訓又アタシ氏ヨムカリノ心ニ用
元ウツス等訓スヘシ字彙往見
又是レハ少シ也不通ト云説アレ氏化城ヨリアダシト説来ル可

或人ヲ化スルト云化ノ字ノ訓古来ヨリ在シ其時ハス、ムト可
統欲能キ道ニス、メアシキ道ニス、ムト荒心ニテナケレバ能化
還化ス不合佛家ニテ不學ノ僧一時ノ能化トナルハ還テ能
バカスノ訓ニモ可叶然レハ月神日神ハ御父ノ能化ヨリトギ
出サレタル祈禱ヲ持チズモ素尊ハ御父ノ愛念ニ化セラレタル故
天ヨリ受ク本生ヲミガキ出ヌ時節喜クソレナリニ云月ヲテ

物アラク我作ニスサマジキ故素尊ト謚ス是ニテ化出ノ出ノ
字ナキヌマヲ可合点日本書紀ノ撰者心ヲ込テ出ノ字ノ有無
ヲ分ケタルニ心ヲ不_レ甘ハ僻支可成扱スサマジト云訓荒ノ
字ニアタリ家ノサムト云ハ屋根モ床モ損ジアバラ屋日前
ニ成タル也野ノサムト云ハ木ノ葉モ散リ果草モ枯タルヲ
云武勇ノ_一ニハ非ズ荒ノ字モ強キ_一才ソロシキ_一ニテハ在シ
荒廢ト云ハ大ニアレ損ジテヌタシ行_一也日本人不學成
ル故アラキト云訓ニ迷ヒ強キ_一カト思ヒ三浦荒次郎ト付
タルハヌタシ次郎也三寶荒神モヌタシ神也異國ノ人ニ

見世難キ神名可成素尊モ政ヲ執ルナケヤリニシテ物
ノスタレタリ成ル我カ佐ノ育ト云御名可成後ニ是神
ニ祀ル時武素尊ト武ノ字ツソヘタリ是ニテ神名モヨクナラ
セテ可成神代下毛ニ始テ武ノ字ヲ加ヘテ書タリ

○即大日靈尊及月弓尊ナラフニヨシヒトナリテリウハシセシムテラシノクニ並是質性明麗故使照臨

天地アツクシタニ並ニト云ハトモココレト云我質性ハウマレフキノ我モ
トヨリモ明麗ナル御徳ヲミガキ出シタレモナレバ君ト補
佐トニシテ天地ニ照臨セシムル也是モニノカナ善ヲニテハ
カハルベカラズ天地ト云ハ天ハ都地ハ田舎日月ノ照カ如ク

ニ照臨シヌル也 ○素戔鳴尊是性好殘宮故令下治根

國クニ珍メ此云于圖顧眄之間此云美屢摩沙可利爾

エレハ自然ト殘宮ヲ好シヌル日本ノ古書ノ人ノ性ノ取アリ
荀子性惡孟子性善揚子兩兼儒者トハ違ヒ性善性惡ヲ兼テ書タリ素尊ナドハ性

惡ニ書タレト見ヘタリ根國ハ王化トビキ難ク陰氣ニ逼ル
國ト云ヌ北方ヘ日輪ノ不巡ガ如クト云喻ヨリ北方ハ子
方故根國ト云フ其王化ノ及難キ國中々仁徳ト通りニテ
ハ難治故ニ其方ヘ征伐ニツカハサル心ナリ以下ハ音注也

○一書曰日月既生次生蛭兒ヒルコ是モ音ニテ讀テヨク

日ノ如キ御神月ノ如キ御神ト云々也此ノ一書ハ蛭見ヲ
シカト三男ニ定メタルガ一説也 ○此見 此二字古本ニモ又
類史ニモ在リ ○年滿三歲脚尚不立 滿ノ字以テ見
レバ凡ソ三十六ヶ月ニ滿ルト云々也ト鳥谷三藏ト云垂加流
ノ人説タレ氏神代何ゾナニヶ月ヲ以テ一年ヲ論セシヤイダ
曆日不定時也二ハ日徳ノ數ニテ十ガク脚立テ玉ハサル也
尚ノ字ヘタザルガゴトシトカク可讀アシノ不立又ニテハ
十シ武徳ノカヒナキ也也シカト勢ノ立難キ也ト可見

○初伊弉諾伊弉册尊巡柱之時 文ヲ本ヘテトシテ

書タリ初トハ御子達イニダ生シ五ハザル前キヲエフ巡柱之
時トハ前々ノ本文一書ヘエツリテ文ヲ畧シテ書タリ ○陰神
先發喜言既違陰陽之理 是ハ前段ノ一書ニテ委ク説
ガゴトシ ○所以今生蛭見次生素戔鳴尊 是ヲ以テ見
レバソレヨリ先キニ生シ五ク日御月神ノ脚ガ立サル筈ナリ
然レハ蛭見ハ編子ニ奇紛紀ニ三男ノヤウニ書タル故ソレヲ
受テ其通りニ立ルガ紀ノ法ナレバ實ニ系リ以テ云ハハ蛭見男
タル一此ニテ知ラセクモ也 ○此神性惡常好哭恚國
民多死青山為枯 性惡ノ一前ニ見ヘタリ哭恚ト云ハ

我作^ニシテ不足^ヲ云^ヒ常^ニ少兒ノ如ク成人ノ徳ヲ不成^レ我
作^レ成^ル故^ニ是^ヲシテ國ヲ治^メシムレバ國民多ク其苛政^ニ苦^ム
ラレテ天年ヲ不終^シテ死^シ百姓ニデ恐^レテ去^ル故^ニ青山モ
枯山ニ成^ルト執^ルヒ強クシテ而モ物ニ廢^ミタル体ヲ書^クタリ書
山モ枯山ニナルト云^フヨリ又サノヲ氏付^ケタル可^ク成^ル用^ニシツ山用^ニ
不^レ立^マリ^ニス^カム^一也 ○故^ク其^ノ父母勅^シ日^ヲ假^シ使^シ汝^ヲ治^ス此^ノ國^ヲ
必^ニ多^ク所^ニ殘^レ傷^ム ○如^ク文 ○故^ク汝^ヲ可^ク以^テ馭^ス極^ニ遠^ニ之^ノ根^ニ國^ヲ次^ニ生^ス
鳥磐椽樟^ノ船^ヲ 極^ニ遠^ニハ王^ノ化^ノ不^レ及^ブノ義^ヲ馭^ルノ字^ヲ御^ト通^ス
イハクス舟ノ一ハ紀ニ委^クテ新^クス鳥ハ翻^ルモノ故^ニハマキノ義^ヲ紀^スハ

イハクスブ子トアリテ生トハナシ天照大神ヲモ生^シ舟ヲモ生^ムト
云^フ他^ノ流^ノ如^キ實^ニ生^シ出^スナラバ人ヲ生^クタル腹^{ヨリ}又
舟ヲモ生^ト云^フ理^ハ不^レ可^ク有^トカク仕^立マ^ゲル^一也舟ヲ作^ラシ
ム^ル也 ○輒^ニ以^テ此^ノ船^ヲ載^シ蛭^ノ見^順流^ヲ放棄^ス ○輒^ニハタマ^スク^レ氏
訓^スル^ル字^也遠^方へ御^代官^ニ遣^ハサ^ルニ御^愛惜^ノ御^殘念^モ
ナク^トノ心^也已^下ハ紀^ニモ前^ノ一書^ニモ如^ク有^カ ○次^ニ生^シ火^ノ神^ヲ軻^遇
寔^智時^伊葦^冊尊^為軻^遇寔^智所^ニ焦^レ而^テ終^ス矣 是^{ヨリ}人^ノ体
ノ神^ニハ非^ズ人^ノ死^シトスル時^ニ立^行ノハナク^一ヲ書^クタリ其^ノ五^行
ニ各^ノ神^名ヲ用^ヒタルモノ也人^ノ死^シトスル時^ニハ元^陽ノ火^ヲタ^カフ^リ

是ガ為ニ苦ニテ死ス其元陽ノ火ヲ名テ軻遇窈智ト云ツテハ
イカヅチノワチト同クツミトカヨヘリ祇ノ字ノ心也軻遇ハ火
ノ切ラエフ一切ノ物火ニ依テ其香来ん神別記ニ香来ト書
テカグト訓ニテ可知一説カミコゲクサキヲカグクサキト云リ
起ル各ナリト云ハ非也カミコ限リクムニアラガレバ也御母母ノ
尊御病氣重ク終ニ崩御ナサレ段リ元陽ノ火ニマアレテ
終リエラト書ク也則愛宕山ノ麓ニ在ル火キ權現是ナリ
愛宕山ノ本社冊尊也火ヲ防シ為ニ愛宕ノ松葉ヲ
竈ノ上ニ敷ヒ置テ古キ證文不慥神祇令ヲ案スルニ

奉復晦日鎮火祭アリノ集解ニ王城ノ四方ノ隅ニ於テ
此祭ナリヲナストアレシ此愛宕ノ松シキヲ用エトハ不見上代ヨリ
愛宕ノ松ニテ火ガ防カルク物ナラバ鎮火祭ニハ用ヒラズベ
キ也其葉ヲ枯レ迄竈ノ上ニ置テ下ノ火付タル時ハ
却テアマリキ一也京中ノ家々是ヲ敬ヒ置テん家々希ナ
レシ度々大火ニ其松モ焼テシムハバ愛宕ノ神トテモ仰
セ分テラシモ毎キ次第ナリ又愛宕山ニモ祈節火更ア
リ是レハ其モトニシテ如是アル人ノ云ハハ福ヲ祈シトテ
貧乏神ヲ我々毎ニ祭ルハキ者アラヤ風ヲ防シトテ火ノ神

ノ櫛ヲ用ユルハ是ニ近シ若祭ラバ貴船ハ水ノ神ナシハ是
ナドヲモ可祭^トナシ^トソシ^トダニモ例ナシトゾ其説アタレリ
又ト部家ノ書ニ神祇拾遺ト云モノ一卷アリ夫ニ愛宕山
ヨリ昔ハサカ木ヲ出シタニ諸坊出家ナレ故中古以後櫛
ニカ^{タリ}ト^モソシ^ト故近年文盲成ル神道者流^ス勸^メテ
愛宕山ニテモ所々ニ坂樹ヲ賣ル所アリ可一哭古来ヨリ
櫛ハ愛宕ノ名産ニシテ山中ニ多ク是アリ^モ藻^シ塩^ホ草^{クサ}ニ愛宕
^{方興集}曾^報好^忠ア^タゴ^山シ^キカ^原ニ^雪ツ^モリ^花ツ^ム又^ノア^トダ^ニモ^ナシ
ノ櫛^原ト^テ哥^ノ名^所ニ^モ成^来レ^リソシ^ト故^矢多^ク諸^ノ葦^土
産ニ買来ル佛前ニ供ムル末香トス梅檀櫛香ト續テ佛前

ノ焼香トスル^ル古来ヨリノ^{コト}也但し先年紅毛人持来セ
シ由ニテ大坂長崎屋上邸兵衛ト云者ノ方ヨリ予ガ父ノ方へ
天竺ノ櫛香ヲ送リタリ香气沈香ニ等ク甚タ別ナ
モノ也然レハ日本ノ櫛ハ別物トシタリ加茂山ニ草
葵多キ故祭リニ是ヲ用ヒテ葵祭リト号シ稻荷
ヲ折ノ名所トシ古来ハ二月初午ニ皆折テカヘリ名
トシタリ櫛ハ愛宕ノ名物也非神木是ヲ竈ノ上ニ
ツリテカ^ハ火^ノ付^タル^時愛宕ノ明神ヲ不可恨
○其且終之間^{スル}卧^シ生^ス土^ノ神^ノ垣^ニ山^ノ姫^及水^ノ神^ノ罔^ノ象^ノ女^ノ

文云卧生卧ノ字有意云此段茅四ノ一書可考合

埴山姫モ罔象女モ唯土ニ名ヲ設ケ水ニ名ヲ設ケタルニ

テ也人体在ルニ非ズ其死トスル時元陽ノ火ノ為ニヤリ

テ内ノ火ハ十レバ終ニ土ニカヘン是レ火生土ノ道理其ノ

ホニ隔ムン所ヲ埴山姫ト云ハハ土ノ一ニテ埴生トワク

レハ四方塗ダレシタル家也衣服ニハニガアガレト云モ此

文字也土ヨリハ金ヲ生ズベキニ直ニ水ヘ移ルハ土尅水ト云

テ搓合所也此モアア所ニテ人死シテ土ニカヘリ又人生ルノ

邊ナリ垂加延佳ナドノ説ニ埴山姫ト云下ニ有ル及ト云字ニ金

徳ヲ持セタルモノナド云ハ非也火ノ神土ノ神水ノ神次ニ稚

産靈アリ木徳ナリ是レテ五行ニ不成四大ノハナル道理

ニナレ此書ノカキヤウ紀ノ奈端諾尊冊尊ノ御出生ニ

テハ水木火土金水ト初メノ水ト後ノ水ニテ六ツニシ水

生木ト諾尊冊尊ヲ木徳ニ當ザレハ木生火ト天照大神ヲ

日徳ニ當ガタシ五行如是次第シテ来レバ人生ズ今テ此一書

ノ如ク四大如是次第シテワレヨリハナレ行ケバ人死ス紀ニ

佛敎四大者謂地水火風也非火地水木ニ地水火風空謂之五大地ハ肉水ハ血火ハ

生ルマシハ五行ニテ書キ書キ死スルヲ佛書ノ四大ニテ書ク

然レハ斐實ハ日本ノ斐ナレ任文ノ梅(方)全ク儒佛ノ書ヲ

カリテ書クモノ也ト可見埴山姫ハハニハワワラカ成ル土

佛敎四大者謂地水火風也非火地水木ニ地水火風空謂之五大地ハ肉水ハ血火ハ生ルマシハ五行ニテ書キ書キ死スルヲ佛書ノ四大ニテ書ク

然レハ斐實ハ日本ノ斐ナレ任文ノ梅(方)全ク儒佛ノ書ヲカリテ書クモノ也ト可見埴山姫ハハニハワワラカ成ル土

ソシガ積リ重リテ山ト成ん土ノ体ヲ神名トス○即軻遇
寔智娶埴山姫生稚産靈ワカハスヒ 前ノ文ニ罔象女コレハ日本人古
来不學ニテ文字ヲウヘソコナヒタルト見ヘタリ罔象ト云ハ
今云コタマノ類ニテ文選東都賦ニ此文字アリ註ニ罔象ハ
木石ノ怪也ト云ヒ水ノ心ナシ谷ナドニヒバキテ其声有ん物
ヘ谷ニ響ト云フ以テ水ノト思ヒ水ノ心ニ用ヒ誤リタル物
ナリ山城國貴船ナドハ罔象女ヲ祀シリサキニ布シ殘シ
タル故此ニアラハス 娶埴山姫元陽ノ火土ニ入テト云ベキヲ埴
山姫ヲ娶テト古風ニ書タルモノ也天地ノ造化モ土ヘ日徳ノ火入
テ万物ヲ生ズ万物ノワカバヘスん天地ノ間ノ造化ノ神靈ヲ
名テ稚産靈ト云フ近年ノ神道者流竹生嶋江嶋ナド
ヲ稚産靈ノ像ニテ在リタルヲ亦又天ニ祀リカヘタリト云フ
僻変ナリ何リ其神体アラシヤ形ナキニ毎キヲ以テ造化ト云
○此神頭上生蠶與桑カシラウヘニナレリカイゴトトクハ 膺中ホソノナカニナレリイワササケウモノ 生五穀罔象此云美都
波 万物ヲ可生造化ノ神靈ノ稚産靈ニテ徳ヲ云フ人体
ノヤウニカリニ書タル物故頭上膺中トハイニ土ノ堅キ所
高キ所ニハ蠶桑ノ類ヒ育チヲ千四テ柔ナリ所ニハ五穀
生スルト云也カヒコ桑五穀ニテ人ノ為ニ衣食ヲ備ユルモ

天地造化ノ功也ト冊ノ尊ハ常ノ人ニハ非ズ造化ノ後徳ノ如クナル徳ゾト貴ブ余リニ准ヘ説テ人ヲシテ是ヲ敬ハシムナリハシム固家ハ音注ナリ ○一書曰伊弉册尊生ホムスヒヲ火産靈時爲子レテ所レ焦而神退矣 火産靈ト云モカグツキト云モ日神ナリ只火徳ヲ云也子トアレハ實ニ子ニテハ吾シ其死ントスル時ニ此神名ヲ殘シ吾ノ故ニ子ノヤウニ書タリ其子ノ爲ニマカレテ崩シテト云説ヨリ俗間ノ説ニ母ノ爲ニアタト成シ子ナレハトテ此神ヲ祭ル所ヲアタゴト云フ今ノ愛宕ト云ハ旧ヨリノ地名ニシテアタゴト付タルハ右ノ政也本ハ丹波國ニ属ス今ハ山城ニ

属ス此山ハ城丹ノ界也昔ハ峠ヨリ丹波ノ方ヘカク方ニアリタリ神退ハ崩御ト云フ也 ○亦云神避カミ矣 此五字古本ニハ細字ニシテ如注上ノ神退ノ二字ハ其精神ニシテ退ノ義亦云ト云ヨリ一説ニテ此ノ世ノ限リヲステ冊ノ尊世ヲサケテ崩シ吾クニ一説又モセノ也然レ上ノ説ヲ可用 ○其且神退ツクサカサラシト之時則生水神固象女 是ハ又直ニ水ヘウツル水尅火ノ道理ニテ其ノモメ合テ神退ニトスルノ苦シキ体古今ノ人非枯木四大ノハナク又何ヲ苦マザラシヤ心サハギテ其体ヲアラハスト此理ヲ考ヘテ安ク死スルトノ羞シバガ別

返ナリ悪人ニ安リ死シタレハ有リ善人ニ苦シ死シタレハ有リ何レモ
苦ム病ト不苦病トノワカチニシテ善惡ノ行跡ヘカレハ
ニハ非ス ○及土神埴山姫フチノカミハニマニヒメヲ 又是ニテ土尅水也相生ニテ生
スレ理ナレタトハ芝燒ヲシテ土ヘ火ヲ入ルハ火生土ナレソレ
ヨリ草木ノ生ズルハ木尅土也是ヲ以テ万物ヲ生ス

○又生天吉葛ミタウムアノヨサアラテヲ 万葉集ニ瓢ノ字ヲヲホソラト詠セタレ
所アリ色ノ青キニ象リ青天ノソラヲ云リ古来ハ多クヒサゲ
ヲ作りテ一切ノ物ヲ是ヘ納メタリ今テヤウニ箱ノ道具ノト
云モノ多キ故イクワセ貯タマハテ物ヲ入ルノ器トス直ニ長ク作

リテニワニワリ是ニテ水ヲモ汲シ也延喜式ナトニモ其意ニヘ
タリ後世檜木ヲ曲テ柄ヲ付テ是ヲヒシヤクト云ハ檜木ノ
シヤクト云フニテハ多シヒサゴノ傳説ナリ諸人ノ重宝ト成
ルモノ故土ヘ天ノ印ヲ以テ如是ノ気ヲ蒔五穀草木ヨリヒ
サゲニ至ル返ヲ生ズト云義ヨサツラトサニ心ナシ能キカツラ
ト云畧語也ツルニナレモノ故カツラト云然レハヨサツラ返ヲ
ウムトツケテ可詭況シヤ五穀ニ於テヤ ○天吉葛此云テシキツカフ
阿摩能與佐圖羅アマノヨサツラト云與曾豆羅ヨソフフラト 音泮也一云己下ノ六
字古木類史ノ本ニハ多シ後人ノ加入ト見タリ源氏物語

シヤノサクト云ト通フ

ナドニ今云ツルア、茶ト云モノヲア、ワラト書タリ、ア、キカ
ヅラノ心ナリカヅラヲ(ワラト)斗リテ説セシ例、此(ハ)引也

○一書曰伊弉册尊且スレ生火神刺遇窈智ツ之時、如シ文

○悶熱懊惱 アワセナヤム 册尊ト云、氏人ナレ故崩御ノ時苦ミ吾ノ体ナリ

悶ハイキドホシクモダ(ハ)苦ム心熱ハ其苦ミ面ニ發スルノ体懊

惱ハ深クナヤム也是ヲツラ子テアツカヒナヤムト説モ熱アル故

勢ノ字カヒト訓スカハキヒル義非即語歟

アツクカヒハ即説ナリナヤムハ其身ヨハリナ(ク)ルガ如クノヤムハ
万変ヲヤスルノ心 ○ヨツテダグリス 因爲吐此化爲神名曰金山彦次ユハリニル小便化

爲神ナラ名曰ミツクノメ固蒙女 セキノボセテ吐スルノ義手ヲ以テダグリ

出スマリニ苦ム也又ト(ハ)バ火射金ノ如ク相尅スル苦ミ故ナヤム

トハイ(ハ)下金徳ハ火ニヤケ雅クヤケテモ色ヲ不愛其病ノ

金逢於火不愛其徳、不愛其色者大不審也

為(ハ)三ハサ(ク)ナヤミ(ハ)五(ハ)臣御本心ヲ乱シ玉ハサ(ク)金徳ノ不

愛カ如クナレタト(ハ)陰神ナガラ男子ノ如ク正シキ徳有リ

トテ金山彦ト彦ノ字ヲソ(ハ)タリ後ニ至テ諾尊ノ徳ノヨハ

ヲソシク女ノマウ成ル御心也ト耻シメテ泣澤女ト神名ヲ付ン

変アリ合セ可見此時ノ苦ミニ七性根ヲ正シク持テ玉ヲ御徳

ヲ越前國ニ金山彦ノ神社トテ祀リ美濃國南宮大明神

ト云モ是ナリ其ニサホヲ失ヒ玉ハガン徳ヲ祀リク(ハ)モノ也火

尅金トモ合内ニ金生水ト水ノ出行ヲ小便トタトヘタリ小便
便ハアタメ、カニシテ湯ノ如クハリ出ル其名ヲ上古ヨリツクバリテ形
キヲ丸クシテ便ヌヲ達スルモノ故ユバリニトアリノ固象女ノ一
前ニアリ ○次大便化爲神ナラ名曰植山媛ハニヤミヒメト 是ハ土ニシテ土尅
水ノ理アリ終ニ土ニ歸スルノ謚也余ハ前ニ見ヘタリ

○一書曰伊弉册尊生火神時被灼而神退去矣

生火神トハカハツチヲ生ム也神退リ前ニ見ヘタリ

○故葬於紀伊國熊野之有馬村焉土俗祭此神之魂者

元明天皇ノ御宇日本國中國名郡名邑名ニ字ニ限リテ

佳字ヲ取シト云勅續日本紀ニ見ヘタリソシヨリ悉ク二字
ト成ル泉ニ和ヲソヘタレハ古名ヲ守テマワライヅトハ不
荒津國ニ振リ加ヘタレハソトナリヨミ上毛野下毛野モ
中ノ毛ヲ去テ上野下野ト書ケルケテノ声ヲ殘シテカウ
ヅケシモツケトヨム本ハ木國ナレハ此時ヨリ紀伊ニ改テ
名ヲ呼所ハキノクニト呼テイトハ不引在名モ二字宛
ニ成リタレハ是ハ大分ニノ一故次弟ニ乱テ三字四字五字
ノ名モアルヤリニ成タリ有馬ハキノクニノ在名古ヘ牧ノ有
レ所也故云有馬今熊野ノ新宮ヨリ北五十所ナリ有

即有馬村ト云ヒ^{ウラタ}産田宮ト云是伊弉册ヲ祀ん宮也其邊
大石有りテ岩屋ノヤウニ極ヘ是ヲ^{ハナ}花窟ト云フ又^{カクレノ}隱窟
ト云フ是册尊ヲ葬リし所ト云々暮春ニ繩ヲ以テサソクノ
幡ノ形ヲ作り窟ノ前ニ引回シテ是ヲ祀ん是神代ノ余風ト
云々^ト那智三卷抄ト云物見タリ此書ハ熊野ノ記録也俗ア
ヤソテ熊野ノ權現ヲ册尊トスんモノハ一向論ニ不足^{朱本}
先後ノ奇カミニソル花ノ時ニモ成リニテリ有馬ノ村ニヤ
白雪土俗トハ所ノ人也 ○^{ハナトキニミタ}花時亦以花祭^{ミフル} 如文夫木ノウ
タモ是ニテ^{ハナ}花時ノ二字ノ上ニ^{ハナ}闕文有りト云

タリ不傳ハ残念ナリタトハ常ニハ何ヲ以テ祭ん花ノ時ニハ亦
花ヲ以テ祀んと云々^{フユ}亦ト云ウズ^{ハナ}能可味見 ○又^{モテツツミ}用鼓
吹幡旗歌舞而祭矣 日本紀天武十二年六月大伴連
望多^{ウミツト}薨ス天皇大ニ驚テ泊瀬王ヲ^{ハラセノ}マカハシ此墓ニテ大此系
ノ位ヲ贈ラシ鼓吹ヲ發シテ是ヲ葬んと有り古来ヨリ祀
ルニ^{ハナ}葬んニモ鼓吹幡旗ヲ用ヒタレト云々^{ハナ}今案んニ册
尊ハ紀ノ國ハ不葬右ニ説迄ノ義ハ諸家ノ學者モアラマ
シニ知リテ此神代卷ヲ證據ニシテ始メヨリ熊野ハ葬リ
タレト^{ハナ}覽(来レリ)古事記ニ云葬伊弉册尊於出雲伯耆

之界比婆山^ニ是トハ大ナレ違ナリイカセシヤ下卷ニ至ツテ
大己貴命出雲ニ御座ナサレシニ熊野ノ諸手舟ニ使者ヲノ
セテ遣ハサレシ一見^ハタリ然レハ熊野ト云名モ出雲ニアリ
是ヲ以テ見レバ出雲ノ熊野可成比婆山六材木多キ所也
出雲風土記ニモ花窟ト云一有リカタク以テ紛ラハシ出雲
風土記宇賀卿北海邊有惱磯^{ト云}其西有窟高廣俱六尺許
窟中有穴不入人故不可許其程近此窟者必死^{ト云}又古事
記ニ黄泉比良坂者今謂出雲國之伊賦夜坂也^{ト云}又
延喜式神名帳ニ云出雲國意宇郡^{イフ}夜神社トアリ頭

注ニ祭伊弉册尊ヲ即崩御地ト云今ニ此ノ比婆山ト云
所^ハモトアタゴ也トテ多^ク詣ノ人多シ出雲ニテ崩シヌクヲ
紀伊國^ハ可葬道理ナシソノ上紀伊國ハハルカ後ニ國名
モ見^ハタリ神武東征ノ時紀ノ國ノ熊野^ハ回リヌクト有
然ラバ何トテ神代卷ニハシカト紀伊國有馬村ト其國
名ヲソヘテ其祀ヲヤリ迄ヲ書載タレバヤト數年工
夫セシ所ニ玉置氏ノ系圖ヲ考ヘ^ハモんニ天武天皇十二年
伊弉册尊ノ神靈ヲ紀國熊野^ハ移シ奉^ル時行列
坂木ニ玉ヲカサリテ供奉セシウ^ルヲ玉木ト云ニ後玉置

ニ改ム又鈴ヲ甘テ御先キヲ拂ヒシ事ヲ鈴木ト云是
等ヲ初メトシ熊野八庄司ト云ハ此時供奉ノ事ノ久
也ト云フ古キ系圖ニ見タリ是ヨリ思ヒ付キ熊野ノ古
縁記ヲサシクニ探求シ熊野ノ別當湛増トイヘン
者ノカキシ系圖アリ平治年中ノ奥書也其縁記ニ今熊
野ノ花窟ハ天武天皇十二年乙未新祭地也蓋鼓吹幡旗
共ニ此時天武天皇勅ニ依テ為祭器ニ後日考神別
記ヲ神別記ニモ出雲伯耆ノ界比婆山ニ葬リ後紀國ニ
移ストアリ右ノ考ノ説他門ノ人ノ所不知也甚可秘

○一書曰伊弉諾尊與伊弉册尊共生大八洲國
如文大八洲國ノ一前ニ見ヘタリ ○然後伊弉諾尊曰
我所生之國ワケウメル唯クニ有朝露タ而薰滿アリテアサギリノミ之哉カホリミテルカサトモヒ 我所生之國ト
ハ我ニ從ヒシ國也有朝露トハイニダ取ヒリ吾ク唯ニ一
統故也漢書ナドニ七國ノハジメノ事ヲ草昧ト書タリ草
昧ハイニダ乱シ昂シテ昧カ故也如其一統セザレハ物毎クラキ
ゾ朝ギリノ立テ不明ニタトヘクモ也薰滿之哉トハ煙ナド
ニシテウフトシキ休ノヤリニテ物毎アサマカナラズト云心也
○乃吹撥之氣フキハラウノイキ化ナリ為神荒日級長戸邊命亦日級長

津彦命^{フヒコノ}是風神也^{ユレカセノカミシ} 天地造化ノ気ニテ之ク霧ノ深クコ

モリタルヲ天地ノ間ノ気^風トナリテ吹捲ラガ如ク彼ノ霧^{モク}

々トクラク不明ヲ風ノ吹捲ラガ如ク御夫婦御心ヲ合

シ是ヲ掃除ナカルクガ如クソレクニ政ヲ行ヒ吾ヲ風ニ

タトヘテ書タルモノ也其御徳ヲ名テ風ノ神トス風ノ神トテ

直ニ風ヲ祀ルニ非ズ造化ノ風ノ物ヲ吹捲ラガ如ク能齊^{トク}ヘ

吾ノガ故其凡用ニ立テ民ヲ助ル一端トナレハ小天地ト云

テ僅ユ尺ノ身ニ天地ノ徳ヲ表スルニ天地ニ凡アレバ人ニ息ア

リ^ト莊子ニ大塊噫気曰風トアリ然レハ息ヲイキト云訓

モ強ク和訓^氏難云^ト莊子ニ風ヲ天地ノ噫気ト書クレバ

漢語ナレニヤ每度漢語梵語ノ和語ニ紛レ入タルモノ多シ

是ヲ強テ和語ニテ工夫シテハ間違多カレト説^{トク}ハセ

以テ此等ノ謂也和語ニテ工夫シテ見テ難^ト源^トモノハ梵語漢

語ヘカリテ可見^ト間々^ト源^トアリ草木モソレナリニテハ人用

ニ不立諾尊^ト冊^ト御心ヲ合テ人用ニ立マラニ被^ト成^ト之故草

木ニ付テモ此神^ト恩^トハスベキ^ト為^ト木ノ神^ト草ノ神^トト云ヲモ

立ラシタリ^ト委^トシク上卷ノ紀^ト新^トル^トガ如シ中臣^ト祓^ト朝^ト乃

御露^ト夕^ト乃^ト御露^トト書クタルモノ此段ヲ以テ書クタルモノト云

中臣祓^{三十九代}天智^{御宇}成^{此史}四十四代^{元正}御宇^成然^{レハ}祓^ノ文^ヲ史^ハ
トリタル可成

タリ別ニ説有テ書クニテハ盡シ其神徳ヲ名テ級長^シア
邊^メ級長津彦^トヲ^シガト不可^シ説ソ^レ故古事記ニハ直ニ
志那都比古神トアリ是ニテ^シガト不^レ説^リツ合点^ニ今ノ
俗學者凡テ^シガト説ハ考ヘ^ノアラキ故也此神靈ヲ伊
勢^トド^ニテハ直ニ風社ト祀^ル蒙古ヨリ日本ヲ攻^ムントテ^モヨ
ソ^レオヒシテ来^リシ時此ノ風ノ社ヘ勅使ヲ立^ラシシカバ大風吹テ
蒙古ノ舟悉ク破^レク^ルニヨリテ^ソヨリ社号^リテ改^テ風宮
トセラ^ル是^レ風ノ宮ト云名ノ初也○又飢^ニ時生^ル兒號^ス倉
稻魂^命ト^カハマハラカト云訓ニテ人ノ腹中^ニ食満^ムトキハ

ヤハラカナラズ不^レ満バマハラカ也ソレヤハラカ成^ル時ハ食ヲ欲^ス
諾^ム尊^ニ冊^ニ尊^ニノ食ヲ欲^シ吾^ガ如ク天地造化モヤハラカ成
ル所ニハ^ハ穀^ヲ生^ズ其^ハ穀^ノ神靈^ヲ名^テ倉^倉稻魂^ト之^ヲ
凡^テ古書ニハ大^ヲウ^ト訓^ス又日^ヲカト訓^ス大日^ト書^テウ
カ也此^ハ穀^ヲ生^スル^ニモ大日ノ功也故ニ和訓ノト^リヤウハ大日
ノ^ニモト^モ思^フベシ文字ノ心ハ藏^ニ積^上ケ^タん^稻ノ^ニモ^ヲ以^テ其^稻ノ
守^リノ神ノヤウニ倉^倉稻魂^ト書^タリ^也ニ^モ稻^生ト云^ニ神^体
モ是^ナリ^ケトカト通^ストヨウケ大神ト云^ニ直^ニ造化ノ日輪
ノ号^ナリ^又食^ノウ^ヲテ^ハ訓^ス食^國ト書^テ日本紀ニ^モテ

クニト読セタリ。是ニテ可知然レバ豊受食ノ訓豊大
食ノ心アリ。○又生海神等號少童命。此德化
ニ依テ海嶋ノ主迄モ子ノ如ク從ヒ仕ルトノ義ナリ。此ノ
海神ヲワダツミト云ハワダハ海ノ義ツシハ祇ノ義文
字ヲ少童ト書タムハ一向大人ノ礼ヲ不知邊鄙ノ号也
此少童ノ神此時ニ從ヒタムガ後ニ彦火々出見尊
ノ嶋へ渡ラセテウヲ敬ヒテ誓トス妾クハ紀ノ龍宮ノ段
ニ見ヘタリ。○山神等號山祇水門神等號速秋津日
命木神等號句句廻馳土神彌埴安神。山々ノ

司ヲシテ居ル主ニ從ヒ山祇ト云ヒ水門ト云テニトトクノ
主ニ從フト速秋津日ト云ハ江川ノ水悉ク集リ流シ出
ル所ナレバ秋津ノ名アリ木ノ神土ノ神ノ一皆前ニ有リ
ツシテ何トテ此へ書出スナレバ是迄ノ神切ヲ集テ書タム也
○然後悉生萬物焉至於火神軻遇寔智之生也其母
伊弉册尊見焦而化去。是テ万物ヲ不殘人用ヒテマウ
ニ被成置シレト句ヲ切テ次ニ其功終ヘテ冊尊ハカクワチ
ノ為ニ崩御有ルヲ化去ト書タリ日本ノ古風ハ死ルナレバ死
又ル生ルレバ生ルト迄ノ詞ニテ化ノ字ノ義ナシ儒書ナドハ

弥以テ無之遷化ナド、遣フハ佛書ノ言也何ノ化去ト云ハ
古語拾遺遷化ト書テニカント訓セタリト佛書之中未見言死為化去之文
ニヤ案ハ此等七佛敎ノ説ノ自然ト入りテ筆者ノ筆
癖ニナル程何ゾアラヤ

神ニ死ノ理ハナシカリニ死スルノ義ト云ヒ又化シテ神ト成

ト云ノ理ニ説ニテ可有於予ハ本文ノ文字俱ニ不取之是

ニテハ佛書ニナリナリ ○于時伊弉諾尊恨之曰唯以一兒

替我愛之妹者乎 此段神代一書第一ノ雅義ノ場カニテ

先達皆説得タルヤリニ書置クハ其根ヲヲセバ一々不當

本文ノ依ニ説ケバ怪異ニ渡リ理ヲ以テ准ヘ説ケバ其本体ヲ

失フ故ニ予モ是ニ苦ムル數十年四五年来漸其説ヲ得

スルニ似タリ此段ニ諾尊母尊ノ回答アリ生人ト死人トノ

回答ナレ故ムツカシ理ニ依テ説ケバ其理佛世ニ成リ文字

ノ面ニテ説ケハ土中へ入テ面鏡スルニ成ントクト一勾ゴトニ心ヲ

トメテ可見諾尊恨ミテ云フト云ハカリノ文ニテカグツクノ

為ニ崩シテ云フハ熱火ニシテ實ノ子ニハ非ズソレヲ斬テ

恨テ此雅義変ナリ然レニ唯以一兒替我愛之妹者乎ニ

説文ニ妹ハ女弟也ト云日本紀ニヨレバ履伴天皇ノ卷

第七下ノ面ニ汝妹ト書テ細注ニ儼汰モト可讀由アリ

及ルハカウルハキナニモトニカトモモ

ヒトフコヲ

○

ウラミテ

ワダ

ヒトフコヲ

キリ

汝妹

今コニ愛之妹ヲウルハシキナニモノミコト、諾セタリ

履仲紀ニアル汝妹ハ則皇妃ノ事也古來妹也妻也故

ナレシイモト、云心ニテ可有 ○則匍匐頭邊匍匐

脚邊而 是し頭ノ方脚ノ方ヲ掩サスリハフバヒテ

性体ヲ失ヒナゲキ五ク体也 ○哭泣流涕焉其淚墮

而為神 下卷紀ニ此文字有テ我ヲ忘テナゲク体也

源三位頼政ノ集ニワガコヒヲ扱ヤワスルト思ハトセヨ

キテモワビシ子テモスベナシト詭ルガ如ク寢テモ居ラ

ズ起テモ居ラレズ天下ヲ初メニ治メント思召ス心モ止テナ

ゲキ五ク体ニダリガハシク其淚墮而為神トアリ大和ノ國

十市郡ニモ此神社アリ是ハ出雲ニテノ支ク成ニ後ニウツ

タル可成 ○是即畝丘樹下所居之神號啼澤女命矣

ウ子タカキ所ニテ本ノシゲリタル本其神社有リト也其

神名ヲ啼澤女ト号ス澤ハ淚ノ墮テ澤ト成ル形是別

非有神日本最初ノ天子ノ御父タルベキ御身ニシテ如

是トリ乱サセ五クハ男ニ非ス女モ同前ノ心ナリトイヤシメ

テ諾尊ノ御心ノクダリタル所ヲ啼澤女ト女ノ字ヲ付テイヤ

シメハヅカシムルノ号如是ノ大人トイハレ其徳落ル時ハ万民

心ハナレテイヤシムルノ如是ト踊ニ遠ノミセシメノ為ニ名
クハ平也万葉集ニ七啼澤社ノ一アリ然レ氏サスガ天下ノ
業ヲ始メテノ程ノ御人ナレハ後ニ至ワテ此性体ナキ御心
ヲ取直テテノ神子ノ一別此一書ノ奥ニシテ

○遂接所帶十握劍

十握ハ年一束ニテ長サ十束有

ルト云也心ハ陰敷ノ結リクニ人志ル時陰気サシフニラ
表シクニ敷也ワルギノ訓蔓布也○斬斬遇寔智爲三段
此各化成神也 是ハ喻也三ト云ハ火敷也火ノ精ハ日也
陰気ニ陥リ啼澤女トイヤシメラルル程ノ一ナレ氏ワル所

ハ陰気ノワリクニ劍ヲ接ト云所ニテ接放フ所ガ陽也カグ
ワチヲ斬ト云ハ陰火ヲ愛ジテ陽火三ノ敷ニテ此各化成
神トテシクノノ諾尊ノ神慮ニコレル ○復劍又垂血是爲
天安河邊所存 血ト云ハアカキ色也其アカキ色ノ明ラカ
ナレ徳ニカヘリテヲ見テ啼澤女トイヤシメ離レタル臣トモ
國ニノ子モ又如旧從ヒクニテ天安河邊所存五百箇磐石也
安河邊ハマスクト流テ異義ナキノ河原也相談ノトゴホラ
サルニ喩タリ ○五百箇磐石也 五百ト云ニテハ無シテモ
万ニテモ同也多クノ磐石ト云也漢土ノ書ニモ石精昇リ

テ星ト成ルトアリ其精昇テ星ト成ルニハ非ズ地ニ石ノ有
ガ如ク星ニ無限物トノ喻也星ハ臣ニ喻フ日月星ト之
時日ハ君月ハ神佐ノ臣星ハ衆臣也天文ノ序ニ七朝廷ノ官
ヲ悉ク星ニ准タリ上ニ十握ノ劍ト云ハ鉄ニテ製スルモノ也是
レ火ホノ金也五百箇磐石ハ火ホノ石也是迄本妻ノ死ヲ悲ミ
闇ニ迷ヒ心如闇成リタルニ心ヲ取直シ玉ハ火ホニテ火ヲホ出
スガ如ク神心ニホシ明ラカニ成タルヲ取合テ其神心火ヲ
イヅレノ臣下ヘ對シテモ明ラカニ見セヌ故イヲツイハムヲ
ト數多ク書タリ ○即此經津主神之祖也 此時ノ

御徳ニ懷テ經津主神ノ先祖臣下ト成ルヲ直ニ其名ガ先祖
ノヤウニ書タレ也下卷ノ紀ニ經津主ノ先祖ノ事有リ紀ノ旨
ナリニテハ何ニ故臣下ト成タルト云子細難説盡故ニ紀ニテ
荒増ニ説テ此所ニテ其子細ヲ委ク述ルナリ
○復劍鐔垂血激越為神 ツミハワバ也又金ヲ何故
モワニテウツ故ツミバト云畧シテワバト云ラ是ハ又我が本
邊キ物ニテ其手本近クナツケヌウ明ナレ徳ヲ垂血ト云
シタルトハシタヘタル也 ○号曰甕速日神次燖速日
神其甕速日神是武甕槌神之祖也亦曰甕速日命

次ヒノハヤセノミヨト燧速日命タチミカフチノカミ次武甕槌神

此ノ系圖ハ紀ノ本文ニ委シケル

畧ス經津主ヲ日取神ト号シ武甕槌ヲ日ト神トシテ其先

祖日德ヲ取テ信シ從ヒ日德ヲト得テ信シ從フノ心也後世是ヲ

東國ニ祀テ鹿嶋香取ノ兩社トス今ノ文字ハ後ノ義也日ノ

シニルト云ヨリ旅立スル初日我が家ヲ出ルガ初日ノシニリ

故カシニダチト号ス不出内ハイマダトラサレ故也○復劔鋒

垂血激越為神号曰磐裂神次根裂神次磐筒男命

コノ陽徳磐石草木一切ノ物へ渡リ磐ヲ割テ七火有リ木ノ

根ヲ割テ七火有リ岩ヲサクハ火赤ノ火也根ヲサクハ七火ノ

火也一切ノモノへ悉ク其火徳ウツリテ從フト也○一日磐筒

男命及磐筒女命イハフメ是モ紀ニ委ク見ミテ可考合

○復劔頭垂血激越為神号曰闇竈次闇山祇次闇田

象ハ古事記ニ和上ト書テソシ故頭ヲタカミトヨム年ニニギ

リタニ握ノ頭ト云フ也手ノ内ニニギリクニクラキ所ヨリ

出ル火ナレバ是ヲ名テ闇竈ト云陰火ノ惣名也龍火雷

火自然ト云フ野火海上ノ火ヲ初メスベテ陰ニ属シ名

火迄モ天地ノ間ニアル火ハ日光ノ余リトシバ諾尊ノ御

心ノ明ニナラセテ以テ是迄治メ玉ヒシ國々モ元ノ如ク

從フト云心也此クラヲカニ付テ垂加流十ドニテハ龍雷ノ
傳ト云フ有リ後世偽作シタレ説ニテ一向取ルニ不足如是俱
ニ死ナサルヲ憂ヒ玉ヒシモ佛心ノ日徳起リシヨリ陽火モ陰火
モ備リテ山ニモ水ニモ其火徳ヲシメシ殘シ玉ハ山ヲ住ウキト
スル人モ水ヲ住所トスル人モ悉ク臣下ト称スルニ勿論此段
土生金金生水ト次并ク互此ニ因象女ヲ入レテ諾尊ノ木
徳ヲ水生木ト助ケテクル書ヤリ也 ○然後伊弉諾尊^{イハクノノミ}
伊弉册尊^{イハクノミ}入於黄泉而及之共語^{トモニカケル} 死タレ人ヲ追テアトヨリ
其所ヘユカレキヤ佛説ニテ云如ク死シタレ後ニ別世界有テ

行クナラバ又本ノ通り諾尊カヘリテ道理ナシ其上佛説ノ通
リニ後世^{ゴセ}有テ性キテアヒ玉クハ我妻ノ死シタレヲ悲ム天下ノ
政ヲ可初ク捨置死シテ行玉ク迷フノ甚キモノ也イカニ
神取アリハ此迷ヒヲ以テ墮獄セラレベシ何ヲ後世^{ゴセ}ニテ死タレ
妻トユクト物諾アルベキヤ又ソシテハナレテ説時跡ヲ追テ
入於黄泉而及之共語ト云至不殊殊ニ黄泉ノ二字ニ儒者
コトノホカ差結リ神道者流モ迷惑シテ此黄泉ノ二字ハ
佛書ニ所言ノ黄泉ノ二字トハ別也孟子左傳十ドニアレ
黄泉ノ文字ト同ト説ケルソシテモ底流セザルハ左傳ニ

アル黄泉ノ字惠公元年三月ノ文ニ有テ洋ニ黄泉ハ地中ノ
泉也ト有テ穴ヲ掘テ人ヲ埋メタル所ヲ云孟子ノ注ニモ黄
泉ハ地下也ト云莊子ノ著ハ雜篇ニ黄泉致ト云字有リ
ソシニモ執^{ホフテ}之致黄泉ト云多ニテ只地ヲ掘テ其穴ノ一也
然レニモ方彙集衰^ノ号ノ中ニハアル原ノレソホノ國ニ家ナキヤ
又カヘリコヌトヲソ國黄泉乃^ノ界余^ノ下畧^ノ此^ノ号ノ説ヤウハ全ク
佛法ニ云迷途ノ一也世^ヨ滿國^ニ延喜式ノ説詞ニハアリシカレバ
ヨモソト云訓ハ世モソキク^ト云我ナレバ是ヲ孟子左傳ヲ
引テハ不合黄泉ノ旅ト云事^ニ佛教ニハ有^レテ^ハジケレ^ハ後ノ佛

迷途ハ六趣也迷途黄泉ノ旅ト云^ハ孟文^ノ飯^ノ僧^ト也今日ノ人間界^ノ即迷途也
書ニハ有リテスラ^ノ古事記^ノ日本紀^ニ佛書^ノ渡リ^テ後^ニカキ
佛書^ニテモ黄泉ヲ世界トセシ^レ未^レ見^ル其^レ文^也近代ノ書^ニ不足^レ論^ル今案^ニ黄泉^ノ掘
タレ^ルモノナレバ文字ノ書^ニヤウ^ハ全ク佛書^ノ黄泉^ヲ借リ^テ書
孟子^ノ左傳^等書^ニ趣^テ向^テ依^テ佛^ノ教^ノ之^レ説^ク歟^トヨモソ^ハヨ^クガ^レレ^ル可^ク成^ルソ^ハ如^ク語^リ
タレ^ルモノ也佛書^ノ文字^ニテハ此方^一合^カガ^レ不^レ立^ト思^ヒサ^ソク
或^ハ四^方ヲ^ル義^歟
ニ世^ノ話^ヲヤ^キテ^ハ儒書^ニアル^ル黄泉^ノ字^ヲ探^リ出^シテ^ハ説^ク

ホド文字ノ出所ハ知シテ本文ノ爲^ハ一向^ニ不合^ル物^ニ成^ル也
旧ヨリ佛書ヲ借リテ説ク^ル所^ニ甚^ク多^クシ然^レモ其^レ意味
ニ於^テハ別^ナリ其^レ説^クク^ルナラサレバ神代表^ハ不^レ海
ト云^モ也先^ニ達^ノ書^ト能^ク考^見此^一要^スミ^タヤウ^ニ成^ル文^ニテ^ハ其^レ
實^ハ不^レ海^而也^也弟^一此^ノ共^ノ語^ト云^段ヲ^トク^ト不^レ合^ル点^故也

物而人死スル時ハ殯スト云テ是ヲ未葬歟ヲ云和訓ハ
カリモガリハ徒然草ニ云キ葬テ後モカリモガリト云欲別室ノト見（又）
リノモノモト、云モガリノガリハ伊勢物語十トモ誰
別室ヲカリト云キ喪室ナレ故モガリト云
ガ元（モト）（行キテト可（ト）云ヲ誰ガガリユキテトアリ其殯ノ
間我ガ家ニ死骸アルヲ愛ヒシボシテ或ハ其棺ヲ明ケテ
是ノ見ルガ如キナリ只ツラクト思ヒメグヲセバ往方ノ
難忘定テ死シクハ妻ノ魂モアラム如是云ヒテ我ヲ恨レ
ナラント我カ心ニテ云ヒ我心ニテ答ヘ迷ノ途ノ自問自
答ノ段ナリソレ故神別紀ニ及之共撰ノ四ノ如キ其

語カミルガト書タリ如是ニテ能済也

神代卷一書辨書二之終

